イダー×魔法少女　５５５☆MAGIKA　～THE LAST K/NIGHT MISSION～

亜雲AZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×魔法少女　５５５☆ＭＡＧＩＫＡ　～ＴＨＥ　ＬＡＳＴ　Ｋ／ＮＩＧＨＴ　ＭＩＳＳＩＯＮ～

【Ｎコード】

Ｎ３５３２Ｖ

【作者名】

亜雲ＡＺ

【あらすじ】

誰かの為戦う戦士、友の為に戦う少女。決して交わることの無い者同士が出会うとき、その『約束』は果たされるのか……？ありそうでなかった５５５×まどマギ、ついに登場！ファイズよ、絶望（やみ）を切り裂き、希望（ひかり）をもたらせ！

プロローグ

かつて、誰かの『夢』を守る為に闘う青年がいた。その名は『乾巧』、またの名『ファイズ』。彼は悪しき『オルフェノク』から人々を守る為、今もなお闘い続けている。

そして今、たった一人の友との『誓い』の為に闘う少女がいた。その名は『暁美ほむら』、またの名『魔法少女』。彼女は絶望を振りまく『魔女』と闘い、全てを捨てて友を守る為闘っていた。

青年は『誰か』の為、少女は『一人』の為に闘う。

青年は『誰か』を想い、少女は『一人』を想う。

この二人の似ているようで違う、闘う『理由』と『想い』。

そしてこの物語は、この少女、『暁美ほむら』によって引き起こされる……。

荒廃した町、そこにそびえ立つが如くたたずむ巨大な『何か』。そして肩を落とし、うつむいたまま立ち尽くす一人の少女『暁美ほむら』。その容姿は少女というには大人びいており、服装はセーラー服のよう。髪は黒のロングヘアー。左腕には不思議な模様の盾が装着されている。そしてその眼には涙が溜まり、泣きじゃくる度にその涙は溢れ、大粒の滴となって足場に点々と後を残す。

「……また……、また駄目だった……。私は誰にも頼らなかった。なのに……なぜ？　なぜなの？　誰かに頼れば裏切られ、誰にも頼らなければ力が足りない……。どちらにしてもあの娘を、『――』を守れない……！　私一人じゃ駄目なの？　私はいつまでたっても、

あの娘を守れない、弱い存在のままなの……？」
　その数秒後、ほむらは感情を押し殺すかのように無理やり泣き止み、涙を一滴残さず右腕で念入りにふき取る。そして顔を上げるとほむらの顔は鋭い目つき、そして冷たい眼光。たった今まで涙を流していた少女の面影は何処にも無かった。
「……いいえ……あきらめないわ……。たとえ誰かを見殺しにしてでも、この手を赤く染めようとも……『――』との『約束』を果たす……！」
　ある意味危険ともとれる決意を固め、髪をかき上げるほむらの横に真っ白な体、赤い宝珠のような眼、背中には赤い円、耳から生えているようにみえる何かの先端は桃色、その色の境界には黄色いリングがついている。その正体は願いを叶えるかわりに少女を『魔法少女』へと変える者、『キュゥべえ』だ。
「『――』は凄かったね。あの『ワルプルギスの夜』を一撃で倒しちゃったんだからさ」
　その声に感情はなく、機械音…いや、棒読みといったほうが正しいだろうか。とにかく、生気の感じられない声であった。ほむらはキュゥべえと一言二言と言葉を交わし、巨大な『何か』のいる方向とは逆の方へと歩き出した。
「戦わないのかい？」
「……私の戦場はここでないわ……」
「暁美ほむら、君は……！」
　キュゥべえが言葉を言い切る前に、ほむらは左腕に装着された盾を稼動させた。するとほむらの周りの時空が歪み、そこに出来たワープホールのようなものにほむらは入っていき、姿を消した。
「……なるほど、それが君の力だったのか……。時を止める力を持っているのも納得だよ。おそらく君はこれまでにも数多くの時間を巻き戻してきたんだろうね」
　キュゥべえはまぶたを閉じ、うなづきながら言う。そして、眼を見開き、こう言った。

「でもね暁美ほむら。その力は周りにとっていいものじゃなんだよ。おそらく今君は体験しているだろう。君が時間を繰り返し、歪めていったツケを……」

そういうと、キュゥべえもどこかへと歩き出した。

「楽しみだよ暁美ほむら。今度は、どんな『絶望』を見るのかな？」

そして、キュゥべえの予言どおり、ほむらの行く世界（じかん）は多くのイレギュラーによって運命は大きく変えられる……。

文字通り時をさかのぼりほむらが目覚めた同時刻。そこから新たなる出会い、新たなる別れ、新たなる運命、新たなる戦い、そして新たなる希望と絶望。全ては、ここから始まる…！

仮面ライダー×魔法少女　５５５☆ＭＡＧＩＫＡ　～ＴＨＥ　ＬＡＳＴ　Ｋ／ＮＩＧＨＴ　ＭＩＳＳＩＯＮ～

二つの世界が交わりし時、少女の「約束」は果たされるのか……。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

プロローグ（後書き）

作者「はい、てなわけで始まります！　『５５５☆ＭＡＧＩＫＡ』略して『ファイマギ』！　ハッピーエンドになるかはまだ分かりません。もしかしたらこれもまたループのひとつなのかもしれません」
ほむら「冗談じゃないわ。お断りよそんなオチ」
作者「あ、あとほむらの出番はまだ先だから」
ほむら「ええっ！？」
巧「最初は俺と！」
マミ「私の！」
巧＆マミ「「まどマギ本編開始前から始まるぜ（わ）！」」
ほむら「わけがわからないわ……ｏｒｚ」
作者「そんなわけで第一話【Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ　Ｗｏｒｌｄ】を宜しくお願いします！」

第1話（前書き）

巧「うん？サブタイトルねぇぞ？」
作者「あぁ、ネタバレ防止で、目次には話数しか書いてないんだ。それに作中にサブタイトル書くほうが好きだし」
巧「ふぅ～ん……。じゃ、始めるぜ」
マミ「ちなみに第1章のイメージソングはファイズのＯＰ曲よ！」
巧「（最近読んでた人が歌詞関係で削除されたからぼかしてるのか……）」

追記：その人復活してました！復旧頑張ってください！

スマートレディ「おねえさんも、応援してまーす♪」
巧「Σどこから出てきたっ！？」

第1話

――……私は繰り返す。何度でも……！

どこかから聞こえる声。悲しみ、怒り、様々な感情が交じり合った声が……。

第1話【Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ　Ｗｏｒｌｄ】

「……あれからもう3年経つのか……」

もう一日の半分がたった昼下がり。土手に寝そべっている青年が一人、ぽつりと呟く。彼の名は乾巧（いぬいたくみ）。またの名『５５５（ファイズ）』。彼は今も戦い続けている。ようやくつかめた自信の夢の為に……。

3年前、『オルフェノク』の王『アークオルフェノク』が倒され、オルフェノクの本拠地でもあった世界的企業『スマートブレイン』は解体された。しかし、それ以降もオルフェノクは生まれ続け、人々を襲っていた。巧は『デルタ』である三原修二（みはらしゅうじ）、人間との共存を望むオルフェノク達と共に戦っていた。

「さて、そろそろ行くか」

巧は立ち上がり、バイク『オートバジン』に乗る。

「……久々に行ってみるか。あそこに」

行き先を決め、巧はエンジンをかけ走り出した。行き先は……東京。

一方、とある町……名を『見滝原』。現在午後4時。

「ふぅ……今日も学校が終わったわ……」

通学路。一人の少女が歩いていた。制服を見ると中学生だろうか……。だが、そのスタイルはもはや大人顔負けだ。そして黄色い髪に縦ロールになっているツインテール、とても印象の強い容姿をし

ている。左手の指には指輪をはめていた。綺麗な黄色の宝石がついており、その輝きは美しいの言葉がよく似合う。
「……一旦家に帰ってから、『パトロール』しましょうか……」
そういって少女は駆け出した。

何も変わらない日常、変わらぬ日々。だが運命の歯車は、既に狂っていた……。

〜〜〜〜〜

――東京。
時は6時。辺りは暗くなりはじめ、人気のない道を青年が走っていた。
「配達で遅くなっちゃった……。早く帰らないと！」
青年は菊池啓太郎（きくちけいたろう）。クリーニング屋を営んでいる。今は、配達で帰りが遅くなってしまい急いでいるところだ。よほど急いでいたのか、路地裏などを使っていた。
「はぁ……はぁ……、疲れ……って、あれ！？」
啓太郎が休もうと立ち止まると、そこはいつの間にか知らないところにいた……いや、景色が変わったのだ。
「えぇ！？　何がどうなってるの！！？」
啓太郎は困惑していた。そこは……まさに不可思議空間だった。

――一方、見滝原。
少女は手のひらに卵のような形をした宝石を持ち、町を歩いていた。制服姿のままで。彼女は今、先ほど言っていた『パトロール』を行っているところだ。
「『ソウルジェム』の反応が悪いわね……。今日は収穫なしかし……？」
『ソウルジェム』と呼ばれる宝石が急に輝きだした。鮮やかで美

しい、黄色い輝き。
「近いわね……。この反応は……、『魔女』！」
少女はソウルジェムの輝きを頼りに駆け出した。

――戻って東京。
「……どうなってるの？　これ……？」
トランプのような装飾がされた迷路、あたりにやたらと貼られている赤いハートマーク、まるで某ふしぎの国のような迷宮。昔ビデオで見たトランプの兵のような者も居たが、ファンシーな景色のせいか、啓太郎は警戒しつつもその足を進めてしまう。そしてそれから少し歩いていると、景色が突然大きく歪みだした。
「な……何！？」
それから少しして景色が安定したのか歪みが納まる。しかし、先ほどまでの景色が一変。辺りは暗くなり、ハートの意匠は残しつつも、あたりには地面に突き刺さった十字架がたくさん……、そこはまるで墓場のよう。しかも昔処刑で使われていた首を切り落とすギロチンが何台ある。いずれもおびただしい量の血がこびりついている。既に誰かがあれで殺されたのだろうか、そんなことを想像してしまい啓太郎は身震いを起こす。
そして、その空に浮かぶ赤い月に何かがいた。
それが異形の怪物だと、形だけで分かる。その体は人体を模しつつ、首が無かったのだから……。
「……何あれ……？　オルフェノク……じゃない！？」
そして、月から異形の者が啓太郎の前へと降り立った。その姿は２．５ｍはあろう某特撮物の元人間の怪獣のようだった。どす黒い体に、胸部にはさかさまのウサギのような顔がある、しかしその顔はどくろ、かわいさなど微塵もない。むしろ不気味だ。啓太郎は腰が抜け、その場に倒れこんでしまった。叫び声すら上げられず、地に尻をいつけたまま動けなくなっていた。この怪物にはあのオルフェノク以上に恐怖を感じてしまっている。単純に体の大きさに驚い

ているのもあるだろうが、それよりも怪物から発せられているのであろう、どす黒い邪気が啓太郎の恐怖心をより一層掻き立てる。
「……ゥグオオォォオォォオオォォッ！！！」
「ぅ……うわあああぁぁぁぁぁっ！」
啓太郎が全身の力を振り絞り出来たことは叫ぶ、これしか出来なかった。そして脳裏に浮かぶ走馬灯。特に三年前の記憶が現れる。その中には、乾巧、ファイズの姿があった……。
「たっくん……」
啓太郎がそう呟き、怪物の腕が啓太郎を掴み取ろうとした、その瞬間(とき)だった。エンジン音が辺りに響く。怪物は音に敏感なのか、耳を押さえるようなしぐさを見せ、うろたえている。そして……。

「うおりゃあああっ！！」
銀色のバイクが跳び、怪物に突っ込んで撥ね飛ばしたのだ。怪物はギロチン台に突っ込み、台を倒す。バイクが停止し、運転手がそのヘルメットをはずすと、その顔は、啓太郎の知る男だった。
「大丈夫だったか、啓太郎」
「……ん……、たっくぅぅぅん！！」
乾巧、その人だった。
「ど、どうしてここに！？」
「いや、よくわかんねーけどさ、気づいたらここに……」
「……ムォ！！」
怪物が何か言うと、周りにトランプに手足が生えたようなものが巧と啓太郎を囲む。
「たっくん！　何なのこれ！？」
「俺が知るか！　よくわかんねぇけど……」
巧はオートバジンに乗せてるアタッシュケースから、ベルトを取り出し、それを腰に装着した。

――　一方見滝原でも、危機が訪れていた。そこは、とある路地裏。

「あなた……一体何なのかしら……？　人間ではなさそうね」
少女の目の前には、蚊のような姿の灰色の怪人がいた。彼女は先ほど言っていた『魔女』を追いかけていたのだが、運悪くこの怪人と出くわしてしまったのである。
「お前が知る必要はない……。どうせここで死ぬのだからな
怪人から感じられる殺気。だが、少女はそれに動じない。むしろ余裕を保っている。
「あら？　まるで私の負けが決まってるような言い草ね」
「事実だ。只の小娘に何が出来る？
怪人が挑発するように語り掛ける。もちろん、少女はそれに乗ることはない。
「悪いけど、『只の』小娘じゃないの」
そう言って、少女はソウルジェムを掲げる。
「私は巴（ともえ）マミ。そして……『魔法少女』よ！」

――東京。

巧は懐から携帯電話型トランスジェネレーター、『ファイズフォン』を取り出し、変身コード「５５５」を入力、ＥＮＴＥＲを押した。

≪Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ≫

ファイズフォンから機械音声が流れ、巧はそれを折りたたみファイズフォンを天に掲げた。

そして同時刻、異なる場所で同声の言葉が発せられた。

「「変身！」」

≪Ｃｏｍｐｌｅｔｅ≫

巧はベルトにファイズフォンをセット「Ｃｏｍｐｌｅｔｅ」の音声が流れる。すると装着しているベルトから赤い管が現れ、巧の体は赤く光る。その姿を紅き閃光『ファイズ』へと変えた。ファイズは右手首を振る。

そして、マミもソウルジェムから発せられる光によって、『魔法少女』へと姿を変えた。

２つの場所に、異なる戦士が同時に現れたのだ。

「……行くぜ」

「覚悟なさい、怪人さん！」

〜〜〜〜〜

Ｆａｉｚ　ｓｉｄｅ

「さて、まずは……！」

ファイズはオートバジンのバイクハンドルを引き抜き、ファイズフォンから『ミッションメモリー』を取り外す。そして、それをバイクハンドルに取り付けると、

≪Ｒｅａｄｙ≫

赤い刀身が伸び、ファイズ愛用の剣『ファイズエッジ』となった。
「オートバジン！　啓太郎を頼む！」
『ＰｉＰｉ』
そう叫ぶと、オートバジンが変形する。

≪Ｂａｔｔｌｅ　Ｍｏｄｅ≫

オートバジンはバイク形態「ビークルモード」から戦闘形態「バトルモード」に変形した。
「……っし！　お前ら、容赦しねぇぜ！」
トランプもどきが一斉に襲い掛かるが、オートバジンの強力なマシンガン攻撃、ファイズの攻撃に圧倒された。
「あ？　たいしたことねーな」
トランプもどきはよくある「質より量」なのだろうが、無数に発射される銃撃の前では効果をなさなかった。
「すごい……」
啓太郎はそれしか言えなかった。
「じゃ……相手はお前だ！」
ファイズが目をつけたのは、今回の元凶であろう怪物。ファイズは怪物に向かって走り出す。そして怪物もまた、ファイズに向かって拳を振り上げる。

Ｍａｍｉ　ｓｉｄｅ

「はぁっ！」
マミは白いマスケット銃を数本召喚、それを怪人目掛けて放つ。戦国時代の某合戦のように銃を持ち替えて連射、単発式であるマスケット銃の弱点をみごとにカバーした戦術である。
「おっと！」

しかし、怪人ははねを広げ、それを飛んでかわす。その姿はまさに蚊。マミは若干それを気味悪く思った。
「中々やるわね！　でも……っ！」
マミは自信の周りにさらにマスケット銃を召喚、それを放とうとするが、それよりも怪人の攻撃が速かった。怪人のくちばしが、マミの胸を貫通、心臓に突き刺さったのだ。
「え……ぁ……？」
（くふふ……これであの小娘も死んだか。奇妙な技を使っては来たが、流石に俺に敵うは……ずが……！？）
怪人は驚いていた。怪人の思惑通りなら、マミは死んで灰となっているはずだ……。しかし、マミは灰どころか死んですらいなかったのだ。本来ならそれは驚くどころか、むしろ歓喜するところだ。だが、マミの場合『ある点』が異なっていた。
（馬鹿な……！？あの小娘……人間のまま……だとぉ！！？）
怪人がマミに対して放ったのは『使徒再生』。大抵の人間はこれで死ぬがまれにそれを耐え切り、『同属』となることがある。しかし、マミは人間のまま、それを耐え切ったのである。
無論、怪人の動揺（それ）は隙となった。それを、マミは見逃さなかった。
「よくわからないけど……チャンスね！」
マミはマスケット銃を持ち替えながら連射、それは怪人に命中、しかも怪人のはねを打ち抜いていた。
「ぎゃあああああっ！！　ぐえぇっ！」
怪人ははねを失い墜落、地に叩きつけられた。
「……はぁっ！」
「ぐっ！？」
怪人がふらつきながら立ち上がるが、黄色いリボンが怪人を縛り付けた。かわいらしい花の錠がついている。
「……これで終わりね」
「馬鹿め……連射しようがちっぽけな銃じゃ俺は死なない！　こんなものすぐに破って……」

「確かにそうね。でも……」
リボンを破ろうとする怪人の目の前に、巨大な銃口が現れた。マミが巨大な銃をリボンで作り上げたのだ。
「これはどうかしらね」
巨大な銃に魔力が込められる。怪人は、これを食らえば間違いなく死ぬ、そう予感した。
「なあぁ！？　ま……待て……！」
怪人は命乞いをするが既に手遅れ。魔力のチャージが完了したのだ。
「『ティロ・フィナーレ』！」
巨大な銃口から、それに見合ったサイズの光弾が打ち出された。その威力は絶大。怪人はその光弾に飲み込まれた。
「ぐおおぉぉ！　ば……かなぁぁぁぁ！！」
怪人は青い炎を上げ、灰となって絶命した。
「……くっ！」
マミはその場に座り込み、胸を押さえる。
「さっきのあの攻撃はなんだったのかしら……。急に体がだるくなったけど……」
あの攻撃、『使徒再生』は効果は発揮せずとも、肉体には確実にダメージを与えていた。なんとか立ち上がると、辺りからパトカーの音が聞こえた。あれだけの銃声が聞こえれば、通報されずとも警察は駆けつける。マミは警察が来ないうちにその場を離れる。
「あっ……『魔女』！　すっかり忘れていたわ！」
マミは慌てて『魔女』の元へと向かって行った。

Ｆａｉｚ　ｓｉｄｅ

「はああぁっ！」
ファイズエッジが怪物の左腕を切り裂く。怪物は悲鳴を上げたじろぐ。オートバジンはすでにトランプもどきを一掃し終わった後だ

った。
「たっくん！頑張って！」
「分かってる！　これで終わらせてやる！」
ファイズエッジからミッションメモリーを取り外すと、動力を失ったファイズエッジは元のバイクハンドルに戻った。ファイズはそれを啓太郎に投げ渡し、今度はベルトに付けられているデジタルカメラ型パンチングユニット『ファイズショット』を取り出しミッションメモリーを取り付けた。

≪Ｒｅａｄｙ≫

そしてファイズはそれを右手に装備、ファイズは一度怪物を見る。怪物は何かを悟ったのか、無傷の右拳でファイズを殴りつぶそうと拳を振り落とす。ファイズはそれを回避、ベルトに装着したままのファイズフォンを開き、ＥＮＴＥＲを押す。
「お前と俺の拳、どっちが強いだろうなぁ？」

≪Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ≫

ベルトから右手にかけて力が集中される。その間ファイズは右手をスナップさせ、その後右拳を力強く握り締めた。そして、チャージが完了。ファイズは再び振り落とされた拳に向かって必殺技『グランインパクト』を繰り出した。
「ゴオオォォッ！！」
「はああぁぁっ！！」
拳と拳の競り合い、征したのは……。
「っらあ！！」
「ブォアアアッッ！！？」
ファイズだった。殴り飛ばされ、浮き上がった怪物を迎撃すべくファイズは跳んだ。

≪Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ≫

そして、ファイズは怪物の顔？　目掛けて再び『グランインパクト』を叩き込む。

「やあああああっ！！」

爆音にも似た打撃音が響き、怪物は急降下していく。

「ブギャアアアアアアアアアアアアアッッ！！！」

怪物は地面に叩きつけられ、赤い「Φ」の文字が浮かび上がると同時に爆発したのだった……。

ファイズが変身を解くと、怪物が倒されたからなのか、景色はごく普通の道路に戻っていった。

「はぁ……疲れた……」

巧はその場に座り込んでしまった。

「たっくんお疲れさま。あと……ありがとう」

啓太郎が笑いながら巧に礼を言う。

「別にいいって……うん？　なんだこりゃ」

巧が何かを見つける。それは黒い宝石のような、禍々しい『何か』。

――今宵の戦いはほんの序章。本来ありえないはずの物語（たたかい）は今、幕を開ける。そしてこれは、ある少女の歪んだ物語の始まりでもある……。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第1話（後書き）

巧「なんか戦闘シーンがあっさりしてたような気がするな」
作者「まぁ……そこは気にしないで；」
マミ「今回こっちサイドは私だけだったわね……」
作者「まぁ本編開始前だからね」
巧「つーか、なんで俺は3年も生きてんだ？それにオートバジンまで復活してるし」
作者「そこは次回触れると思うよ」
巧「だといいな。そんなわけで次回は【共存していく者達】だ。次回も見てくれよ！」
ほむら「早くまどかと私の出番来ないかしら」
さやか＆杏子「「アタシらは蚊帳の外かいっ！」」
三原「というか俺名前だけか……ｏｒｚ」
作者「ちなみに今回登場した魔女とオルフェノクの紹介！」
　ウサギの魔女：その性質は「残酷」　ジャミラのような体つきで顔はさかさまのどくろにつさ耳をつけた感じ。パンチの破壊力は高いが『グランインパクト』には勝てなかった。結界は最初「不思議の国～」で、魔女のいる場所は「歪みの国の～」をイメージしました。
　トランプの使い魔：その役割は「兵」。ハートのトランプにそのまま糸のような手足をつけた物。１個体の戦闘力はかなり低い。
　モスキートオルフェノク：蚊の姿を模したオルフェノク。変化する人間は男である以外は不明。使徒再生にはくちばしを用いる。飛行能力を持つがはねがもろいのが弱点。

第2話（前書き）

作者「第2話、5時間程度で書けちゃった」
巧「お前遅筆って言ってなかったか！？」
作者「テンション上がるとこうなることがある」
マミ「流石きまぐれ作者ね……」
啓太郎「とりあえず、今回は新キャラ登場だって！」
巧「大体想像つくメンバーだけどな……」
作者「そこ、想像つくとか言わない。ではだ」
ほむら「第2話、始まるわ。今回はどうなるのかしらね」
作者「台詞とられたっ！？」
ほむら「出番出るまで、前書きをと後書きはジャックさせてもらうわ！」
まどか「いいよなぁ……ほむらちゃんは……orz」←同じことやろうとしていた
さやか「それに比べ……orz」←上に同じ
杏子「アタシらなんて……orz」←言うまでもなく
ほむら「……申し訳なかったわ；」
三原やら海堂「「つーか俺達は……？」」

第2話

「見滝原」、ここには一人の魔法少女がいる。巴マミだ。彼女は先ほど灰色の怪人を倒し、追跡途中であった『魔女』を探していた。先ほどの戦いから、マミは体にだるさを感じていたが、それを無理して魔女を追跡していた。魔女は人を襲い、殺すからだ。

「はぁ……はぁ……！　ようやく見つけた……！」

無人の駐車場、マミはようやく魔女の潜んでいる『結界』を見つけ出し、魔女を倒すべく結界へと入り込んだ。

しかし、魔女の結界の割には結界が安定していない。さらに膨大な魔力を有する魔女がいるならば、それを感じ取ることが出来るはずだ。しかし、マミはどれだけ気を探っても魔女を見つけられなかった。つまりここは、『魔女』の結界ではなく、その『使い魔』しかいない結界なのだ。おそらく、魔女は結界の一部を切り離し、マミがそちらに気をとられている内に逃げ出す魂胆だったのだろう。いわば「トカゲの尻尾きり」。マミはそれにまんまとはまってしまったのだ。立ち止まってしまったマミに、使い魔達が襲い掛かる。

「……許せない……」

マミは青筋を立てていた。もっとも、マミは元々切れるようなことはほとんどない。だが、今夜の出来事はマミを切れさせるには十分過ぎた。謎の怪人との戦いは結局無駄足、無駄に時間を使った挙句にこちらは体調不良を起こし、そこから生まれた焦りが魔女の捜索に支障を来たし、より魔女の捜索に時間がかかった上、結局見つけた頃には魔女は逃げ、そこには使い魔しかいなかった。魔女にいっぱい食わされた自身への怒りなどが混ざりあい、マミは体の疲れやだるさすら忘れ、怒りがマミの体を動かすエネルギーとなってい

た。おとなしい人が怒ると怖いとは言うが、今のマミはまさにそれだった。

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

マミは怒り狂う竜の如くマスケット銃を召喚、射撃する。怒り狂いながらもその狙いは正確。確実に使い魔を打ち抜いていた。わずか数分、マミは全ての使い魔を倒した。結界は崩壊し、マミは変身を解いてその場に倒れこんでしまう。落ち着きを取り戻し、疲れやだるさが戻ったのだろう。

「はぁ……はぁ……ふぅぅ……」

マミは荒い呼吸を整え、深く深呼吸する。

「……我ながらひどいわね……怒りに身を任せて戦うなんて……。これじゃ正義の味方なんて言えないわ……」

マミは魔法少女を「正義の味方」として、誇りに思っていた。正義の味方が怒るがままに戦ってはいけない、そう考えていた。

「マミ、大丈夫かい？」

マミにとっては聞きなれている声がした。声のした方に向いてみると、兎のような、猫のような白い生き物がそこにいた。

「『キュゥべえ』……」

「ソウルジェムがかなり濁ってるね……」

おそらくテレパシーの類で話しかけているのだろう。証拠に喋る際に口を動かしていない。白い生き物『キュゥべえ』は背中から黒い『何か』を出した。

「完全に穢(けが)れを取り除くことは出来ないけど、少しぐらいならまだ大丈夫だよ」

そう言って、マミに黒い『何か』を渡した。

「ありがとうキュゥべえ」

そう言ってマミは指輪からソウルジェムを取り出し、『何か』を

近づける。すると、ソウルジェムから、邪気が出てきた。それを、『何か』が吸い取った。ソウルジェムはまだ穢れを残してはいたが、先ほどよりは輝きを取り戻している。
「ところで、魔女はどこに行ったのかしら？」
「あの方角だと……あの隣町だね」
キュゥべえが意味深にその方角を見つめる。それを見て、マミは察する。
「なるほど……『佐倉』さんのテリトリーね。なんだか悔しいわ……」
マミは苦笑する。
「そんなことより、今日はもう家に帰ったほうがいいよ。疲れてるみたいだし」
「そう？　でも……」
「君に今倒れてもらうわけにはいかないんだ」
キュゥべえは自分を心配して言ってくれている、それを無為にするわけにはいかない、とマミは思い、キュゥべえに従うことにした。
「そうね……そうするわ」
そう言ってマミは立ち上がる。すると、マミは思い出したかのようにキュゥべえに尋ねた。
「ところで……灰色の怪人みたいなの、知ってる？」
「灰色の怪人？そんなのは知らないけど？見たこともないしね」
「そう……使い魔の一種かと思ったんだけど……。まぁいいわ、ありがとねキュゥべえ」
マミは立ち去った。キュゥべえはその後ため息をつく。
「マミ……君にはまだ倒れてもらうわけにはいかないよ。君にはまだ戦っててほしいしね」
そう言ってキュゥべえは歩き出した。
「灰色の怪人……ね。僕達に危害をくわえるようなら……魔法少女達には注意してもらわないと」

第2話【共存していく者達】

巧と啓太郎は夜道を歩いていた。
「ふーん、車は車検に出してたのか」
「うん、だから徒歩で配達してたんだけど……ね」
啓太郎はうつむく。先ほどの体験は既にトラウマレベルなのだろう。
「いや……思い出したくないなら別にいいぞ」

気づけば、巧と啓太郎は啓太郎の家の前であった。
「真理ちゃん、ただいま」
啓太郎がドアを開けると、同居人である女性が出てきた。
「啓太郎、遅かったじゃな……って、巧!?」
「おお真理、久しぶりだな」
『園田真理(そのだまり)』、彼らと同じ、「共存」の思想を持つ女性だ。
「……でも、ちょうどよかったかも。今日はちょっと作り過ぎちゃって」
「たっくんも食べよ？　久しぶりの再開だし」
「……ああ、そうするよ」
巧は笑いながら、家に上がった。

〜〜〜〜〜

三人そろっての夕食を食べていた。
「……うまい。また腕上げたな」
「そう？　いつも食べてたから気づかなかったよ」
啓太郎ののろけっぽい発言に、なんだよそれと巧が笑う。先に言っておくが、啓太郎と真理は付き合っているわけではない。真理は啓太郎の家の居候なのだ。
「ところで、どうして巧が？」
「ああ……実はな」

「……そんなことがあったのね」
真理は先ほどの出来事を知った。謎の空間、そこに住む怪物のことを……。
「俺もあんなのを見たのは初めてだ」
「それはそうですよぉ」

「「「え？」」」

気づけば、三人以外に別の人間がいた。
「は～い、スマートレディの、おねえさんで～す」
「え……えええ！？　い、いつからそこに！？」
啓太郎が驚く。もっとも巧と真理も驚いているのだが。
「先ほどからですよぉ。インターホン押してもノックしても返事がないので、入ってきちゃいました～」
「「いやいや！　むしろおかしい！！」」
巧と真理が突っ込む。ところでかぎは！？　と啓太郎が言う。
「あ、安心してくださ～い。かぎはちゃんと閉めておきましたから。危ないですよぉ、かぎの閉め忘れは！　次からは気をつけましょうね。おねえさんとの、約そ」
「長々しいんだよぉぉぉ！　何なんだ一体っ！」
巧がついに切れた。
「乾さん怖～い。えーん」
スマートレディは泣きまねをする。それを見て巧はため息をつく。
「……で、『それはそう』ってどういうことなんだ？」
巧がそう尋ねると、スマートレディはすぐに泣きまねをやめ、わざとらしくコホン咳き込む。
「そうでした。まず、乾さんが接触した敵については……まだよく分かっていません。なんせ、今日突然現れたのですから」

「今日……突然？」
「はい、私達とオルフェノク、そして第３、第４勢力が現れました」
「『第４勢力』？　あれの他にも何かあったのか？」
「はい。不思議な力を持った少女達で～す」
　それを聞いて、三人は吹き出す。
「不思議な力を持った少女って……なんだそれっ！？　『魔法少女』とかそんなのか！？」
　「そうです」
　巧がおかしいだろそれと言いたそうにしている。
「嘘ではありませんよ～。彼女達のせいでこちら側のオルフェノクまでやられてしまいました～」
　それを聞き、巧は顔をしかめる。
「とりあえず、彼らには出来るだけあれらと接触しないようにを言っておきましたが……」
「ところで、海堂と三原は？」
「海堂さんは相変わらずふらふらしてます。三原さんは……数日前からオルフェノク討伐で遠出中。ついでに、琢磨さんは『見滝原』と呼ばれる場所で工事に行くようですよ」
「『見滝原』？　どこだそこ」
　巧には『見滝原』と言う場所に心当たりがなかった。啓太郎と真理もいまいち分かってないようだ。
「おねえさんにもよくわからないんですが～、なんでも最近になって急速に近代化している市だそうですよ～。もっとも、その人たちにも『見滝原』という場所に心当たりはなかったようですよぉ」
　わけわかんねぇなと巧は頭を掻く。
「とにかく、情報が入り次第お伝えに行きま～す。では」
スマートレディは帰っていった……。それは、嵐が通り過ぎたが如く。
「……スマートレディって、一体何者なの……？」
「さぁ……今は『味方』……だと思う。オートバジン直してくれた

し……多分」
困惑する三人であった……。
「ああ……ところでさ、今日俺ここに泊まってっていいか？」
「あ、うん。たっくんの使ってた部屋空いてるから、そこ使って」
「……そーいや、あいつにこれ見せるの忘れてたな……」
巧はポケットからあの時手に入れた黒い『何か』を出し、少ししてそれをしまった。

〜〜〜〜〜

――その頃、見滝原町。

「やっと手に入れたわ……『グリーフシード』……！」
マミはあの後、偶然別の魔女を見つけ、それを倒していた。そして、魔女から落とされた黒い『何か』、『グリーフシード』を手に入れていたのだ。マミは先ほどと同様、自身の持つソウルジェムにグリーフシードを近づけ、穢れを浄化する。体のだるさはまだ残っていたものの、体調は回復している。
「今日は帰ってすぐに寝たほうがいいわね……」
そう言って、マミは自分の家に帰って行った……。

――そして、隣町……。

「らああぁぁっ！！」
一閃、槍の一撃は魔女を切り裂き魔女は消滅、グリーフシードを落とす。そして、空間が元に戻っていく。そして、グリーフシードを少女が拾う。赤いポニーテール、パーカーにショートパンツ、ボーイッシュな印象のつり目の少女だ。

「へっへっへ……これで４つめ。今週は大量大量っと！」
少女はポケットに詰め込まれたグリーフシードを見て、笑いながらたった今手に入れた物もその中に入れる。その姿はまるで大金を手に入れたよう。
「きゃあああああ！！」
女性の叫び声が聞こえる。それも、すぐ近く。少女は悲鳴の聞こえた場所へと赴き、現場を目撃する。

おそらく、風俗店勤務の女性だろう。服装が派手だ。そして女性を狙っているのは、灰色の怪人だった。少女は気づかれぬよう、物影に隠れて見ていた。
「なんだあれ、見たことねぇ奴だなぁ……。魔女でも使い魔でもなさそーだけど」
少女はそう言い、振り向いた。
「ま、アタシには関係ないか。あの女……かわいそーに。ついてないってか、ご愁傷様だなぁ」
少女のその声には同情のかけらもない。
「あれはグリーフシード落とさなそうだし、戦うだけ無駄。あっちもこっちには気づいてねー、わざわざ出ている必要もなし。じゃ、そーゆーことで」
そう言って、少女はその場を離れた。少女には、女性を助ける気など微塵もなかった。ただ、興味本位で行っただけなのであった。そして、女性の断末魔が町に響く。
「きゃ……あぁぁあぁぁっっ！！」
「……るせなぁ。黙って死んどけよ……ったく」
少女は耳をふさぎながら、立ち去っていく。その後、女性の死体は見つかることはなかった。怪人によって殺され、灰となったのだから……。

――少女の名は「佐倉杏子（さくらきょうこ）」、手段を選ばない利己主義者の『魔

法少女』。

To Be Continued.

第2話（後書き）

杏子「……」
作者「……」そろ～
杏子「待てやコラ！どーゆーことだオイ！アタシがクソヤロウみてーじゃねぇか！！」
さやか「いやむしろ普通。それがあんたの本来の姿じゃん」
杏子「黙れやこの出番なし！」
出番ない人全員「「「ひでぇ！！前書きで散々へこんでたくせに！！」」」
巧「まぁ、スマートレディが若干予想外だったけど、真理の登場は普通に分かったな」
まどか「……」ジ～
真理「ど、どうしたの？」
まどか「なんだか……それはとっても、懐かしいなって」
真理「……言われてみれば、あなたどこかで……」
マミ「大体分かった、中の人ネタね」
啓太郎「でも、今回はスマートレディは味方みたいだね」
スマートレディ「おねえさん、がんばっちゃいま～す！」
作者「多分、次回はスマートレディがメインの回になる」
巧「スマートレディ何があった！？」
スマートレディ「次回はぁ、【共存の架け橋】で～す！皆さん、次回も見てくださいね～。おねえさんとの、約束で～す！」
ほむら「……なんだか殴りたくなってきたわ」イラッ
巧「止めとけ。あいつは全てにおいて謎だ。未知の戦闘能力を持ってるかもしれない」
真理「ついでに言うと、劇場版では私に化けていたわ」
ほむら「……止めとくわ。まどかに変身されたら手がだせないわ」
作者「では、次回をお楽しみに！」

マミ「というか私のキャラ崩壊にはだれも突っ込まないのね……」

第3話（前書き）

作者「今回は過去のお話です。多分、現時点で一番ぐちゃぐちゃな回かと；」
巧「大丈夫かオイ」
マミ「それはそうと、ＰＶで既に５０００アクセス突破したわ！」
まどか「ユニークでも１０００アクセス！　すごいね！」
ほむら「これで私達が登場でアクセス数が一気に上るのが目に見えるわ……」
さやか「舞い上がっちゃってますね、あたし達！」
三原「ただ、今回は作者も認めるぐちゃぐちゃな回……」
海堂「これで見るファンも減るかもしれないぜ？」
杏子「んなのあってたまるかー！」
作者「ぶっちゃけこれ番外編でもいいかと思いましたが、大事なことが入ってるのでナンバリングに入れました」
巧「……まぁ、大事なとこ以降はおまけと言っても過言じゃなさそうだしな……」
スマートレディ「では第３話、行きましょーか」

第3話

それは、3年前……。『アークオルフェノク』が倒されてから少し経ってから……。

「……ここ……だよな」

巧はとある廃工場に来ていた。その手に、謎の手紙を持って……。

第3話【共存の架け橋】

「乾……お前も来たのか」

「お前……海堂か！？」

そこにいたのは、海堂直哉（かいどうなおや）。かつて巧と共に戦った人間側のオルフェノクだ。

「あ……あと、そこにもいるぜ」

「あなたは……乾さん」

今度は琢磨逸郎（たくまいつろう）。元は敵対関係にあった者だ。しかし、かつてのその敵意は感じられない。その服装も、どこかの工事現場の作業着だ。

「あいつ……ほんとに琢磨か？　なんか人間臭くなってるけど」

「ああ……なんでも、最終的に人間として生きてくことにしたんだってよ。ま、信じがたいがな」

海堂は疑いの目で琢磨を見ている。ただ、少なくとも巧は信じているようであった。

「乾に……海堂」

「三原！お前まで来たのか！」

廃工場から入ってきたのは、三原修二（みはらしゅうじ）、『デルタギア』を持つ者だ。

「しかし、何故私達はここに集まったのでしょうか？」

琢磨は時間を気にしているのか、腕時計を確認しながら言う。すると突然、大量のオルフェノクが廃工場に入り込んできた。４人は、互いに背を向け合うように集まった。
「おいおい……これって罠じゃねーのか？」
海堂だ。
「はぁ……急がなければならないと言うのに」
琢磨が言う。
「乾……やれるか？」
三原が巧に聞く。
「当たり前だ！　……ところで、少しいいか？」
「どうした乾、時間はないぞ」
「俺達には、共通点があるよなぁ……」
「あぁ……そーいや、琢磨（こいつ）はともかく、俺達は……」
「「「人間とオルフェノクの共存を望む者！」」」
「ご名答で～す」
４人は背中を向けた方向、つまり、４人の円の中から声が聞こえ、一斉に振り向く。
「は～い、スマートレディの、おねえさんで～す！」
「「「「うわわぁぁぁぁっ！！？」」」」
４人は驚いて再び一斉に倒れこんでしまう。いつの間に潜り込んだのだろうか……。ってかこれは誰でも驚く。
「い……いつからいたぁ！？」
「たった今ですよ～海堂さん」
「この人は本当に謎ですね……」

琢磨はため息をついた。つきたいのは全員一緒だが。
「……つうか、こいつらはなんなんだ！？」
「あなた達を同じ、共存の意思を持つ人たちでーす！」
その数、５０数名。おそらく他にもいるだろう。全員が思った。
「……で、スマートブレインの奴がなんのようだよ」
「……皆さん、長生きしたくないですか？」
その言葉に、全員は頭に疑問符を浮かべる。
「はっきり言いますと、おねえさんに、協力してほしいんで～す」
はぁ？　と巧が言う。
「乾さん、これにうなづくだけで長生きできるんですよ～？」
「だから、どういうことだよ！　お前はあっち側の人間だろ！」
「それは、あくまで社長命令でしたから。今は私個人の行動であり、花形元社長の意思でもあります」
花形、その名前に誰もが食いつく。その社員がオルフェノクであった大企業『スマートブレイン』の初代社長であり、オルフェノクでありながらオルフェノクを滅ぼそうとした男でもある。その名を聞き、巧は静かに聞く。
「……で、なにしてくれるってんだ？」
「まず、肉体の崩壊を防ぐ薬品の治験、そして、『これ』で～す」
スマートレディが指を鳴らすと、銀色のバイクが入り込んできた。

≪ＰｉＰｉ≫

「あれは……オートバジン！！」
「はい。なんとか作り直しました。精密射撃など、ある程度改造してますが」
「……お前……なんなんだ？」
「私達は対オルフェノク組織『ＣＯＥＸＩＳＴ（コエグジスト）』で～す！」
ＣＯＥＸＩＳＴ（コエグジスト）、「共存」という意味だ。
「単刀直入に言いますと、スマートブレインはまだ息を潜めていま

す。オルフェノクの王、『アークオルフェノク』を蘇らせる為に」
「「「「！！」」」」
オルフェノクは死んだ人間が覚醒し、蘇って誕生する怪人であり、いわば進化だ。だがその進化は急激で、肉体が耐え切れず崩壊してしまうのだ。アークオルフェノクはオルフェノクを不死身にする力を持っており、3年前巧が1人の友の犠牲の末に倒した、最強のオルフェノクだ。
「何故だ……奴は乾が確かに……」
「その肉体は滅んではいませんでした。既に不死身の体となった者が、蘇生させようとしています」
「……冴子さんですか……」
琢磨が言った冴子とは、影山冴子（かげやまさえこ）、ロブスターオルフェノクであり、アークオルフェノクによって、人間の姿を捨て不死身となった者だ。
「影山……生きてやがったのか……！」
海堂は拳を握り締める。
「アークオルフェノクは復活するのか？」
「それはどうでしょうか……ただ、万が一復活した場合……」
「させねえよ」
三原の質問に答えようとするスマートレディの言葉をさえぎり、巧は静かに言う。
「俺はようやく『夢』を持てたんだ……『誰かの幸せを守る』って……。その幸せを壊そうとするあいつらを……俺は許さない！」
この言葉を聞き、スマートレディは微笑む。
「スマートレディ……一応、信用してやるぜ。『夢』を……『幸せ』を、『誰か』を守れるなら、俺は戦う！」
「そうだな……復活以前にあいつらを生かしておけない」
「琢磨さんよぉ、協力しないとやばいんじゃないかぁ？」
「わかってます……この際、仕方がありません」
巧に続き、三原、海堂、琢磨が答えた。

「皆さん、ありがとうございます。では乾さん、本題に入りますが……」
「……そういや、さっきは流してたけど、『治験』って何する気だ……？」
「はい？」
「へ？」
スマートレディはにっこりと笑い、巧は間抜けな声を出す。他の3人は何か悟ったようで……。
「乾、死ぬなよ……」
「万が一のことがあったら俺がファイズを継いでやるから、安心して逝け」
「乾さん……あなたのことは忘れません。いろんな意味で」
「いやいや！　お前ら何言ってんだ！？　海堂に至っては何か字が違うし！！」
巧が何言ってんだと言ってる内に、スマートレディはなにやら物騒な装置を用意する。それはまるで、改造人間の手術のような……。
「お、おい……？　『薬品の治験』だよな？　間違っても改造手術とかじゃないよなぁ？　……なぁ！」
「うふふ」
スマートレディは子供のような笑顔で巧を見る。たじろぐ巧をオルフェノク達が拘束、そのまま機械の台に縛り付けた。機械のドリルやらが稼動しだした。

「おいいいいっ！？　止めろぉぉぉぉぉぉぉっ！！」
「乾さん、痛みは一瞬だ」
「それなんか違っ……お前ら！　早く何とかしてく……助けてくれぇぇぇ！！」
スマートレディの某怪盗のような台詞に突っ込もうとするが、その前に3人に助けを請う。だが、巧の懇願むなしく3人はただ見ているだけ、そこを動くことは無かった。

「すまない……俺にはどうすることも……」
「琢磨……俺達もあれの餌食になるんだよなぁ……」
「ええ、目に焼き付けましょう、この光景を」

「こんなのってあるかぁぁぁっ！！？　この裏切りも……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
そのまま巧は……意識を失った……。

「のはあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
巧はベッドから飛び起きる。今までのは夢……ではなく、3年前の出来事なのだ。あの治験は実は注射一本ですむ物で、巧が失神した後でスマートレディが普通に注射を刺していた。3人が何であんなことをしたんだと突っ込むと、スマートレディは、
「なんとなくです」
と回答、3人はそのまま崩れ落ちるように倒れこんだという……。
無論薬品は効果を現し、巧の肉体の崩壊は緩和された。一時の効果の為、数ヶ月に一度、薬品投与を定期的に続けている。が、あの時のせいで巧はそれが苦痛な物になってしまったのだという……。

「最悪だ……」
巧はうずくまってしまう。スマートレディ。表には出さぬものの、巧の恐怖する存在となっていたのであった……。

「呼びました？」
「え？」
巧の目の前には……スマートレディの姿が。その刹那巧は絶叫、啓太郎と真理は巧の部屋に入り込んできた。
「た、たっくん！？　何があったのっ！？」

「巧……って、なんでスマートレディがいるのよ！？　いつ連れ込んだの！」
「俺が知るかあぁぁぁぁっ！！　つーかどうやって入り込んだっ！？」
「窓から入りました～。サンタクロースのような気分でした！」
「サンタは煙突から……じゃねぇ！　堂々と不法侵入してくんなぁぁぁぁっ！！」
「たっくんそれ俺の台詞！　この家俺んち！！」
啓太郎と真理の加入でその場はよりカオスに。巧も突っ込むところを間違いかけ、その突っ込みにさらに啓太郎が突っ込む。
「もう！　何がどうなってるのよー！！」
真理の悲痛な声が響く。

それからもう少しするまで、カオスな空気は続いたのだった……。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第3話（後書き）

まどマギ勢「「「出番が……ｏｒｚ」」」
巧「出番は気にするな！」
杏子「アンクかお前は！」
さやか「あんたが言うな！」
杏子「どーゆー意味だ！」
マミ（大体分かったわ『アンコ』つながりね）
巧「スマートレディのクラッシャーぶりの件について」
スマートレディ「♪」
作者「反応どうなるかなぁ……今回はギャグの実験もかねてたからなぁ……」
全員「「「なんで本編で実験する！？」」」
さやか「なんで！？　あんた馬鹿じゃないの！？」
作者「お前がゆーな」
さやか「どうせあたしは馬鹿ですよ！」
巧「で、あの組織はなんなんだよ」
作者「スマートブレインが組織だったから……いっそこっちにも組織立てちゃえと思ってやった。反省はしていない」
三原「しろよ」
作者「さて、次回は……どうしようかな」
海堂「考えてねーのかよ！」
まどか&さやか「「わたし（あたし）の出番あるよね？」」
作者「さぁ？　ただ、次回は巧達には動いてもらうよ！」
巧「『達』？　まさか……」
琢磨「さて、次回は第４話、サブタイトルは未定です」
ほむら「本格的に決めてないのね……」
作者「どんな話かはすでに骨組みは考えてるよ。ただサブタイトルが思いつかないだけで」

啓太郎&真理「「それじゃ、次回もお楽しみに！」」
作者「ほんと、スマートレディ動かしやすいわ。ただ、毎回名前打つのめんどくさいからＳＬって略していいかなぁ？」
巧「……『クラッシャーＳＬ』……？　なにそれこわい」

第４話（前書き）

作者「今回はあまり詰め込んでないからちょっと短いよ」
巧「つーか第１話からじわじわと字数が減ってる気がするけどな」
マミ「まぁ、そこは置いていきましょう」
啓太郎「前回は過去編だったね。そしてスマートレディ（以下ＳＬ）の異常な存在感」
ＳＬ「別にいつもど～りで～す！」
真理「平常運転すぎるのよ！」
さやか「で、今回こそ出番ある……よね！？」
作者「さあ？」
まどか&さやか「「……ｏｒｚ」」
ほむら「私なんて、実質出番まだ……！」
さやか「ところで、タイトルの英文ってどう読むの？Ｋで区切ってるけど」
作者「普通にＴＨＥ（ザ）　ＬＡＳＴ（ラスト）　Ｋ／ＮＩＧＨＴ（ナイト）　ＭＩＳＳＩＯＮ（ミッション）って読むよ」
巧「そういうのって先に言うもんじゃねえのか……？」
マミ「まぁいいわ。それでは第４話始まるわ！！」
作者「ちなみに前回のあらすじ」
・ＳＬ異常な存在感
・まどマギ組出番皆無
巧「こんなんでいいのかよ！？」

第4話

「……はぁ」
マミは通学路を歩いていた。あの後、体の調子はある程度戻ったが、まだだるい状態だった。それでもマミは登校していた。具合が悪くなれば早退すればいい、そう思いながら。もっとも、マミはまじめな性格なので早退という選択肢は最終手段をしているが。

「やあマミ。学校かい？」
マミはその方向を向く。キュゥべえだ。
「ええ。学校を休むわけにはいかないわ。受験もあるしね」
「マミはまじめだね。まぁ、だからこそ魔法少女を長くやっていられるのかな」
マミはほめられたような気がし、頬を赤くして照れていた。

「じゃあねキュゥべえ」
マミは駆け足で去っていく。キュゥべえはそれを見送った後、足を進め始めた。
「ふぅ……じゃあ、僕も行こうとする……！？」
すると、キュゥべえは突然立ち止まってしまう。そして学校のある方向に顔を向けた。

「……この感じは……ありえない」
キュゥべえはうれしそうに、反面驚いていた。
「わけがわからないよ……本来人間が持つはずのない『才能』が存在するなんて……」
そう言って、キュゥべえは学校へと歩き出した。
「少し、調べてみるかな……」

第４話【交わり往(ゆ)く物語】

あの後、空気が落ち着いたのは数時間経ってからだった……。時間がそこまでかかったのは、スマートレディが空気を何度もめちゃくちゃにしていたせいなのだが……。

スマートレディ以外は荒い呼吸を整えていた。ちなみにスマートレディはお茶を飲みながら普通にくつろいでいたのだった……。

「落ち着きましたぁ？」

「……人事みたいに言ってんじゃねえよ……」

呼吸を整えながら突っ込む。もはや巧の突っ込みキャラは確定か。

……まぁそんなのは置いといて、スマートレディは本題に入る。

「では、本題に入らせてもらいますね」

スマートレディはいつもの調子で口を開く。

「三原さんが例の少女と接触していたようです」

巧はこの言葉を聞き、スマートレディを見る。

「その結果、少女達は『魔法少女』、その敵を『魔女』と『使い魔』と呼んでいるようです」

「まほ……。なんつうか……いまいち信じられねえな」

巧はため息をつく。

「でも、昨日俺を襲ったのは『魔女』、それは確実だよね……。じゃあ、『使い魔』って？」

「『魔女』は呪いから生まれる存在で、『使い魔』はその魔女から生まれた、いわば子供です。使い魔は人を食らうことによって魔女に成長するみたいです」

「人を……！？」

真理は驚愕する。

「それと、魔女は『グリーフシード』と呼ばれる魔女のタマゴというべき物を持っているようで、魔法少女はそれを集めているようです」

「ああ……これのことか」

そう言って巧はあの黒い『何か』を取り出す。そう、それこそ『グリーフシード』と呼ばれる物だったのだ。
「うわっ！？　なんで巧がそんなの持って……ああ、昨日のあれね」
真理は驚くが、割とすぐに落ち着いた。
「それで、なんで魔法少女はその……グリーフシードを集めてるの？」
「そこなんですが……よほど知られたくないのか、そこだけは教えてもらえなかったようです」
啓太郎に、スマートレディが言う。珍しく落ち込んだ顔で。
「……まぁいい。で、俺はどうすればいい」
巧はスマートレディに尋ねる。スマートレディは少し考え込んでいる。
「そうですね～……では、『見滝原』に行ってもらいましょうか。あそこについても調べてもらいたいので」
「調べるって何をだよ」
「乾さんも分かっているはずです。『見滝原』という場所に心当たりがないのを。少なくとも我々は『見滝原』という場所をほとんど知らないですし、魔女同様突然現れたようなものなんですから」
その言葉を聞き、３人は不可思議な表情を浮かべる。
「それ……どういうこと？」
「まるで、それらが別の世界から突然来たって感じだな」
「いや……流石にそれはないと思うけど」
まともに受ける啓太郎、ファンタジーなたとえ話をする巧、それに突っ込む真理。
「ま、とりあえず行ってくればいんだろ？」
「はい、今日はあちらでの準備もあるので、明日出発してください」
「ああわかった」
巧は了承、スマートレディは帰っていった。
「たっくん……明日には出てっちゃうんだね」
啓太郎が残念そうに言う。

「大丈夫だって、なんかあったら連絡してやるからよ」
「そう言って長いこと連絡よこさなかったくせに」
真理に確信をつかれ、うっとたじろぐ巧。それを見て、啓太郎は笑っていた……。
「あ、そういえば朝食まだだったわね。すぐ作るから！」
はっと思い出し、真理はキッチンへ向かった。
「とりあえず、今日はクリーニング屋手伝ってやるよ。配達ぐらいなら出来る」
「ありがとうたっくん。じゃあ、今日はよろしくね」
巧達はそうして、朝を過ごしていたのであった…。

ちなみにこの後、配達中に啓太郎が「た、たっくん！　オルフェノクが！」と毎度おなじみの呼び出しをしていたのは言うまでも無かろう。

〜〜〜〜〜

『風俗店勤務の女性のその日着ていた服や所有物が置かれ、行方不明になっている事件ですが――』

「あぁ〜、昨日のあれかぁ？」
電化店のテレビのニュースを見ている少女がいる。佐倉杏子だ。昨日、女性を見殺しにしたにもかかわらず彼女は平然とそのニュースを見ていた。もちろんそれは昨日杏子が見ていたものだ。もっとも、彼女は既に使い魔を成長させて魔女にする為何人もの人間を見殺しにしてきているのだ。今更一人見殺しにした所で彼女に罪悪感などが湧くことは無いのだ。
「証拠も残さず人間を殺す、か。魔女みたいな奴が出てきたもんだなぁ……めんどくせぇ」
そう言って、杏子は歩き出した。おそらく目的地はコンビニだろ

う。

「さぁて、食料調達していきますか」

彼女は金は持っていない。つまり彼女の食料調達とは万引き、『盗む』なのだ。

〜〜〜〜〜

――夕方、見滝原……。

仲良さげな3人の少女達が歩いていた。彼女達はマミと同じ制服、見滝原中学の生徒だ。おそらく、ゲームセンターに行っていたのだろう。アミューズメント用の景品をいくつか持っていた。

「いんやー、今日も楽しかったなー」

青い短髪の少女が首の後ろで手を組みながら歩いていた。

「あはは、そうだね。『さやか』ちゃんダンスゲーム必死だったし」

ピンク色のツインテールの小柄な少女が笑いながら言う。

「まぁ、その割には点数の方が……」

「『仁美(ひとみ)』……それは言うなぁぁぁ！」

青髪の少女は涙目になって緑色の髪の長い少女に突っかかる。それを見てピンク色の髪の少女は苦笑していた……。

そして、そんな光景を高い所から見ている不思議な白い生き物が一匹、もちろんそれはキュゥべえだ。

「『志筑仁美(しづきひとみ)』……彼女は駄目か……。『美樹(みき)さやか』、彼女は悪くないが平均的……」

どこから調べたのか、青髪の少女、緑色の髪の少女の名前を言う。

「やっぱり、彼女には是非魔法少女になってほしいね」

「『鹿目(かなめ)まどか』……！」

次回、物語は本格的に動き出す。その歯車は歪んだまま……。

To Be Continued.

第４話（後書き）

まどか「やった！」
さやか「よっしゃ！出番ゲットだぜ！」
作者「はい、てなわけでいよいよ物語の開幕だ！」
巧「ちなみにこれ４時間程度で書き終えたぞ」
啓太郎「すごいね」
マミ「短いこともあるんでしょうけどね」
まどか「次回は……第１章クライマックスらしいけど……」
作者「そこは文字数と長さとの相談だね」
ほむら「まぁ、そんなわけで次回は【夢の中で逢った、ような……】！いよいよ私の参戦ね！」
さやか「あえて原作と一緒か」
巧「つうわけで、次回も見ろよ！」
絶望（やみ）を切り裂き、希望（ひかり）をもたらせ！

第5話（前書き）

全員「「「アクセス数ＰＶ１００００、ユニーク２０００突破！ありがとうございます！」」」
ほむら「ついに私の出番！」
まどか「よかったねほむらちゃん！」
さやか「これでまどマギ組全員登場！」
作者「上条は？」
さやか「あ」
巧「あいつもカウントはいってんのか！？」
作者「う～ん、今回で第１章終われなかったなぁ」
マミ「ま、それは置いといて、第５話スタートよ！」
作者「今回はぶっちゃけアニメの第１話書いているようなもんだよなぁ；」
巧「そんなこと言うな。悲しくなる」

第5話

少女は駆ける。チェス板のようなモノクロの世界を。階段を上り、長い廊下を走り、少女は息を切らせながらも足を進める。

そして、少女は非常口の光る標識を見つけ、その扉の前に立つ。

そして少女は、扉を開けた――

曇天、光の差さない闇。その景色は自身の住んでいた町であった。だが、その町にはかつての姿はない。全て、廃墟と化していた。瓦礫どころか、建物すらも浮いている。

そして、上空に浮かぶ巨大な『何か』。一見人間のような姿だが、どちらかといえば逆さまにしたてるてる坊主のようだ。

「何……あれ？　……！？」

少女は何かを見つける。おそらく自分と同い年だろう、長い黒髪の少女。彼女はたった一人、巨大な『何か』と戦っていた。瓦礫を蹴り、空を舞う。だが、『何か』は黒髪の少女を逃がさない。謎の光を発し、それを黒髪の少女に命中させる。彼女の体はボロボロ、それは明らかに劣勢だった。

「仕方ないよ。彼女一人では荷が重すぎた」

目の前の激戦を見、ただ立ち尽くすしかなかった少女に、白い生き物が近づいてきた。少女は犬でも猫でも無い外見を見て驚くが、爆音を聞き再び戦いの場を見る。黒髪の少女は吹き飛ばされ、傾い

たビルに叩きつけられていたのだ。

「でも、彼女も覚悟の上だろう」

「そんな……あんまりだよ！　こんなのってないよ！！」

少女は涙目になり白い生き物に叫ぶ。そして同時に、絶望を感じた。どうしようもない滅びに。

「諦めたらそれまでだ。でも、君なら運命を変えられる」

えっ、と少女は思わず声を上げる。そして同時に、その心に希望が灯り始めていた。

「避けようのない滅びも、嘆きも、全て君が覆せばいい。そのための力が、君には備わっているのだから」

「……本当なの？」

白い生き物に、少女は問う。その言葉には、わずかながらの希望があった。そして、少女は続ける。

「私なんかでも、本当に何か出来るの？　こんな結末も変えられるの？」

遠くで黒髪の少女が叫ぶ。だが、その声は轟音によって、少女の耳に届くことは無かった。そして、白い生き物は少女に答える。

「もちろんさ。だから……」

「僕と契約して、魔法少女になってよ！」

≪ＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉ≫

「っ！」

目覚まし時計の音で少女は目覚め、体を起こす。朝日が眩しい。そして、少女は呟いた。

「はぁ～……夢オチぃ？」

少女は安心する反面、どこか残念そうだった。

第５話【夢の中で逢った、ような……】

少女の名は『鹿目（かなめ）まどか』。どこにでもいそうなごく普通の女の子だ。優しい父『知久（ともひさ）』、頼もしい母『詢子（じゅんこ）』、かわいらしい弟『タツヤ』、幸せそうな４人家族である。

「パパ、おはよう」

「おはようまどか」

父知久は主夫であり、知久はベランダで栽培しているミニトマトを取っていた。

「あ、タツヤと一緒にママを起こしてきてくれないか？」

「わかったー」

まどかは母親を起こしに寝室へと向かった。

「ママーおーきーてー！」

こちらは弟のタツヤ。元気な３歳児である。まどかはなかなか起

きない母を起こすため、カーテンを開き、布団を一気にはがした。
「おっきろー！」
「であぁぁぁぁぁっ！！……あれ？」
母詢子は太陽光を浴びた吸血鬼のような叫び声を上げ、起床した。

まどかと詢子は洗面台で歯を磨いていた。
「……最近どーよ」
詢子は歯を磨きながら言う。
「仁美ちゃんまたラブレターもらったんだよ。今月に入ってもう2通目」
まどかがうらやましそうに言う。
「直接告れないような男（やつ）は駄目だ。そういや、和子（かずこ）の方はどうなってんだ？　別れたか？」
「確か3ヶ月目。記録更新だよ」
まどかがそう言うと、詢子は無愛想に言った。
「あぁ～多分駄目だわ。大抵の男はそんぐらいしたらボロ出すから」
世間ばなしを終えるころには詢子は既に化粧を終え、まどかは洗面して濡れた顔をタオルで拭いていた。そして食卓へ向かう。

「じゃ、行ってくる」
一家の大黒柱である詢子は朝食を食べ終え、出勤する。詢子と知久の仲は良好であり、今でも出勤の際にはキスをするほどだ。
「ほら、まどかもそろそろ学校だろ」
「あ、うん！」
まどかは時計を見て、時間があまりないと知ると急いで朝食を食べる。
「いってきまーす！」
まどかは朝食を食べ終えた後、家を出て学校へ向かう。こんな普通の日常が「運命」によって崩れ去ろうことなど知らずに……。

「さやかちゃん！　仁美ちゃん！　おはよう！」
まどかは遠くにいた2人の少女見つけ駆け寄る。
「おーっすまどか！」
「鹿目さんおはようございます」
まどかに最初に挨拶したのは『美樹さやか』。青い短髪の、活発そうな少女だ。もう一人は『志筑仁美』。お金持ちで優雅な雰囲気を出している。
彼女達は交友関係にあり、よく一緒に登校したり遊んだりしているのだ。
「ん？　まどかリボン変えた？」
さやかがまどかの赤いリボンに気づく。朝、母である詢子に進められたものだ。まどかは派手すぎると言っていたのだが、詢子曰く「コレぐらいがちょうどいい」らしい。
「さては！　仁美に対抗しようとしてるな！？」
「ち、違うよ！　これは……」
まどかは否定しようとするが、さやかは聞いてない。
「くぅ～！　許さんぞまどか！　そんな娘は、こうだ！」
「ちょっとさやかちゃ……キャハハハくすぐったいよぉ！」
さやかはまどかをくすぐり、まどかは大きな口を開け笑っていた。そんな光景を見て仁美はクスクスと笑っていた。それはとてもほほえましい光景だった。
「まどかはあたしの嫁になるのだ～！」
「キャハハ……仁美ちゃん助けてぇ～」
「あらあら」
嫁発言をするさやかから離れたまどかは、まるで母親の背に隠れるように仁美の背に隠れる。それは少女達のよくある光景だ。その後、仁美によってこの悪ふざけは止められ、3人は再び歩き出した。その後ろに『何か』がいることに気づかず。
「……鹿目まどか……」

そんなこんなで学校。現在ショートホームルーム中だ。
「今日はみなさんに大事なお話があります。心して聞くように」
まどか達のクラスの担任、『早乙女和子（さおとめかずこ）』だ。
「目玉焼きとは固焼きですか！？　それとも半熟ですか！？　はい、中沢君！」
突然「目玉焼き」の話を出し、男子生徒に指示棒を向ける担任教師、早乙女和子。生徒の何人かはその理由に感づく。
「え、えっと。ど、どっちでもいいかと……」
「その通り！　どっちでもよろしい！」
男子生徒、中沢はどっちつかずの意見を述べ、早乙女和子はそれを正解と言う。
「たかが卵の焼き加減なんかで、女の魅力が決まると思ったら大間違いです！」
すると、早乙女和子は指示棒をへし折った。ベキッっという音が教室に響く。
「女子のみなさんは、くれぐれも半熟じゃなきゃ食べられないとか抜かす男とは交際しないように！　そして、男子のみなさんは、絶対に卵の焼き加減にケチをつけるような大人にならないこと！」
「あっちゃー。また駄目だったかぁ……」
「だね……。記録更新してたのに……」
さやかとまどかがコソコソと話す。特にまどかは朝に詢子とその話をしてただけにタイミングがよすぎると苦笑していた。担任早乙女和子、男性との仲が中々続かないのが悩みであり、付き合ったとしてもすぐに別れてしまうのだ。和子本人は美人なのだか、もったいない。
「あ、あとそれから、今日はみなさんに転校生を紹介します」
「そっちが先だろ……」
さやかが呟く。転校生より愚痴を優先されたら、転校生もやるせないだろうなぁ、そんなことを思いながら。
「じゃ、暁美さん。いらっしゃい」

そういうと、一人の少女が入ってきた。その瞬間、クラスがざわつく。
「うわぁ……美少女」
さやかがそう呟くように、その容姿は美しいという言葉がよく似合う。大半の男子は頬を赤く染め見とれてしまい、女子は嫉妬する者、いーなぁとうらやむ者、男子同様見とれたり。そんな中、まどか一人が驚いたような顔をして呟いていた。
「嘘……あの娘、夢に出てきた……！？」
そう。まどかの夢に出てきた黒髪の少女と、瓜二つだったのだ。
「暁美（あけみ）ほむらです」
黒髪の少女ほむらは、最小限の自己紹介をして頭を下げた後、まどかをじっと見つめていた。
「え……？」
まどかはほむらの視線に困惑していた……。

「前はどんな学校にいたの？」
「髪綺麗だね。シャンプー何使ってるの？」
転校生が来たときのお約束、質問攻めだ。ほむらは質問に淡々と答えている。
「いやーまさかあんなレベルの高い転校生が来るなんてねー」
さやかはクラスメイトに囲まれているほむらを見ながら言う。
「ところでさ、さっきまどかのこと睨んでなかった？」
「うん……勘違いかもしれないけど」
そんな会話をしていると、ほむらが近づいてきた。頭を抱えていた。
「鹿目さん、確かあなたが保健委員だったわね。気分が悪くなってしまったから保健室に連れて行って欲しいのだけれど」
「あ……うん」
まどかは席を立ち、ほむらと共に保健室へ向かったのだった。

「あ、あの、どうして私が保健委員だって……」
「早乙女先生に聞いたの」
そっけない答え。
「そ、そうなんだ」
まどかは納得する。
「保健室、こっちよね」
「う、うん」
本来ならばまどかが先導しているはずだ。だが、先導しているのはほむらだった。これではまるで、ほむらがまどかを保健室に連れて行っているようだった。
（これ、逆だよね……）
まどかはそんなことを思っていた。そのまま、2人は沈黙する。まどかは雰囲気を変えようとほむらに話しかけた。
「ねぇ、暁美さ……」
「ほむらでいいわ」
暁美さんと呼ぼうとすると、ほむらが即座に言う。
「あ、うん。あの……ほむらちゃん」
1テンポ遅れてほむらが返事をする。
「なにかしら」
「ほむらちゃんの名前、変わってるなって……あ！　別に変な意味じゃないよ！　珍しいなって思って……なんか、ほら！　燃え上がれ～って感じで！」
ほむらの表情が一瞬変わる。どこか、悲しい表情だ。だが、その表情はまどかに背を向けていた為、まどかが見ることはなかった。すると、ほむらの表情が険しくなる。
「……鹿目まどか」
「は、はいぃ！」
ほむらが突然振り向いたので怒らせてしまったのかと思い、思わず声を上げてしまった。そして、ほむらは問う。

「……あなたは、自分の人生を尊いと思う？　家族や友達を、大切にしてる？」

〜〜〜〜〜

――東京、現在１０時。

「ここか」

巧はスマートレディに呼び出され、小さな公園に来ていた。朝方ということもあって、人はいなかった。今更だが、スマートレディの青い制服は浮いて見える。

「あ、乾さん。来ましたか。こちら見滝原までの地図と、こちらで準備したホテルの場所です」

「ああ」

スマートレディから地図とメモを受け取った巧は、オートバジンにまたがりヘルメットをかぶる。

「ではお願いしま〜す」

巧は出発。スマートレディは遠くに行くにつれ小さくなっていく巧に手を振っていた。

「たっくん……行っちゃったね」

啓太郎は仕事をしながら呟く。

「まぁ、すぐに帰ってくるでしょ？」

真理の言葉にうなづく啓太郎。だが、心の中では、どこか不安を感じていた。

（なんだろう……いやな予感がする）

〜〜〜〜〜

――戻って見滝原中学校。現在、体育の時間。走り高飛びの授業だ。

ほむらは走り、高飛びを超える為跳ぶ。

「……！」

ほむらは優雅に空を舞い、飛び越える。その姿に、誰もが見入っていた。

「これって……県内記録？」

体育教師が驚く。ほむらが県内記録の上回ったのだ。

「マジですか……。さっきの授業といい、相当な優等生ですなぁ転校生は」

「本当ですわね……しかも県内記録を更新するなんて」

さやかと仁美も驚きを隠せない。ほむらは心臓病を患っており、そのため入院していたのだが、その姿を見るとどうも信じられない。

「あいつ本当に病み上がり？　ねぇまどか……まどか？」

まどかは黙ったままうつむいていた。まるで考え事をしているように。

「鹿目さん？」

「まどかぁー？具合でも悪いの？」

「えっ！？　あ、いや……なんでもないよ」

まどかは慌ててごまかし、さやかはふぅんと言いながらまたほむらを見ていた。そしてまどかは、先ほどのことを思い出していた……。

～～～～～

「……あなたは、自分の人生を尊いと思う？　家族や友達を、大切にしてる？」

その言葉にまどかは困惑していたが、まどかはおどおどしながらも

ほむらに答える。
「えっ、と。私は……大切、だよ。　家族も、友達の皆も。皆みんな大好きで、とっても大事な人達だよ」
「本当に？」
「本当だよ。嘘なわけないよ！」
頭の中でうまくせり出来ていなかったせいか、ほむらに本当かと言われ、つい強く言ってしまう。まどかはあわててごめんねと言うが、ほむらはその表情を変えない。まるで、人形のように。
「もしそれが本当なら、今とは違う自分になろうだなんて、絶対に思わないことね。……さもなければ、全てを失うことになる」
まどかには、ほむらが何と言っているのか理解できなかった。
「あなたは、鹿目まどかのままでいい。今までも、そしてこれからも」
そう言ってほむらは歩き出した。まどかがほむらを追おうとするが、
「鹿目さんありがとう。もう一人で行けるわ」
そう言って、ほむらはその場を立ち去ってしまったのだった。

〜〜〜〜〜

意識が現在へと戻り、まどかはほむらを見て呟く。
「ほむらちゃん……ほむらちゃんは一体……？」

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｕｎｅｄ．

第5話（後書き）

巧「今回こっちサイドの出番少なかったけど、まぁしょうがないか」
まどか「……大人の対応だ！」
作者「次回こそクライマックス！　もし出来たら外伝も書こうと思ってる」
さやか「で、次回遂に両者接触！？」
マミ「とりあえず、確定していることはひとつ」
全員「「「？」」」
マミ「真理さんと啓太郎さんは出番終わりね」
真理＆ａｍｐ；啓太郎「「ｏｒｚ」」
巧「……おいそこの恵方巻き。こいつの頭食いちぎれ」
まどか＆ａｍｐ；さやか「「やめてぇぇぇ！！」」
杏子「次回は第６話【歪んだ運命の出会い】だ！」
ＳＬ「次回も見てくださいね～」
恵方巻き「じゅるり」
マミ「ここが私の死に場所か……」
さやか「ここで死なないでください！　いや本編で死なれても困るんですけどね！」

――戦わなければ、生き残れない！
杏子「それ龍騎だろ！」

第６話（前書き）

作者「ついに第１章閉幕！」
巧「今回はどうなるんだろうな」
マミ「原作通り、ピンチに私が駆けつけ！」
まどか「私達の見本になって！」
ＳＬ「頭から食べられて死んじゃうんです～えーん」
マミ「ｏｒｚ」
さやか「いや私達に魔法少女がなんたるかを教えてくれるんでしょ！？」
作者「そういう意味では間違ってないけどね」
巧「お前は黙っとけ！」
ほむら「というわけで第６話始まるわ！」

第6話

「すっげぇ……ここか、見滝原ってのは」
只今午後3時。巧、見滝原に到着。到着と同時に町の進展ぶりに驚かされる。東京にはない、近代的な町並みだ。
「う～ん……とっととホテルに行くのもなんだかなぁ……とりあえず、偵察がてら町を回ってみるか」
そう言って、巧はオートバジンを再び走らせた。

第6話【歪んだ運命の出会い】

「はぁ、今日も終わったわね」
学校が終わり、マミはいつものパトロールを始まる。マミの日課であり、今の生きがいである。ふと見ると仲のいい少女達が歩いていた。笑いながら、楽しい下校。
「私も、本当ならああやって……いえ、駄目よ巴マミ。私はもう、明るい道は歩けないのよ……」
『魔法少女』、それは人間に災いをもたらす魔女を倒すための存在、魔女退治という生死をかけた命がけの戦いにその身を投じる者だ。マミはその運命を受け入れたその時から、交友関係というものを断ち切っていた。魔法少女として生きる為の覚悟の証。そして、誰も巻き込まない為に人々から距離を置いた結果でもある。自分の代わりに人々が幸せであってほしい。それが彼女の魔法少女としての理念だ。
そんな彼女でも、本来ならごく普通の中学3年生。時折寂しさがこみ上げてくることもあった。だが、それでもマミは誰とも交友関係を持つことはなかった。自分と親しくなればいずれ戦いに巻き込んでしまう、そう思っていたからだ。マミは少女達を見て呟いた。

「あなた達は……幸せになってね」

その少女達の中に、運命によって出会う者がいることなど知らず……。

――それから少しして、とあるデパートのファストフード店。

「いいよなぁ……転校生は……勉強も出来て、転校初日であんなにモテて。それに比べてあたしなんて……」

「さやかちゃん……そんな影の住人みたいなこと言っちゃ駄目だよ……」

学校が終わり、まどか、さやか、仁美はデパートのファストフード店でおしゃべりとしていた。さやかはやさぐれ、まどかは慰めがらも某地獄兄弟のような発言に突っ込む。

「そういえばまどか。転校生と保健室行ってからなんかおかしいような気がしたんだけど、なんかあった？」

「うん、あのね……」

まどかは廊下でのやり取りを話した。

「才色兼備に文武両道、おまけにスポーツ万能でミステリアス。とどめに電波少女ってどんだけ設定盛ってんだあの転校生は！」

さやかはうらやましそうに、反面呆れるように言っていた。

「それでね。私、ほむらちゃんと前に会ったような気がするんだ……」

二人がどこ？　と聞くと、まどかは頬を赤らめながら言った。

「その、夢の中で逢った、ような……」

それを聞いた瞬間、さやかが大笑いした。

「あっはっは！　まどかも転校生の電波受信しちゃったぁ？」

「ひどいよぉさやかちゃん……」
「でも、夢は深層心理の現れと聞きますわ。もしかしたら、暁美さんとどこかでお会いしているのかもしれませんわね」
さやかに笑われ、顔を赤くしてうつむくまどかに、仁美がフォローした。
「ああそうか。もしかしたら、前世で会ってたのかもよ？　そう、2人はかつて愛し合った運命の……」
さやかは目を輝かせながら妄想していた。そっちの方がよほど電波だと思うが。すると、仁美が腕時計を見ながら寂しそうな顔をしていた。
「あら、もうこんな時間。お稽古がありますのでお先に失礼しますわ」
そう言って仁美は席を立つ。さやかもそれに気づきいつものさやかに戻った。
「今日は生け花？　日本舞踊？」
さやかが聞く。
「お茶のお稽古ですわ。もう受験が近いというのに、いつまでやらされるのやら」
仁美はくすりと笑う。
「お嬢様は大変だねぇ。あたしは小市民に生まれて正解だったよ」
「仁美ちゃんまた明日」
「ええ。鹿目さん、美樹さん、ごきげんよう」
仁美は帰っていった。気のせいか、その背は少し寂しげだった……。

「じゃあ、私達も帰ろっか」
「そうだね……あ、CDショップ寄ってもいい？」
「また上条くんの為に？　さやかちゃんは健気で献身的だね！」
「ちょっ、まどか声おっきい……」
周りの視線が自分に向けられ、さやかの顔は急激に赤くなってい

た。
「……それ、仕返し？」
「どうだろうね、エへへ」
頬を赤らめているさやかに、まどかは意地悪そうに笑っていた。

〜〜〜〜〜

――デパート内別所。

町をあらかた回り終えた巧は、デパートの中にいた。
「ふぅ……小腹空いたし、どっかで食うかな……」
突然、巧は立ち止まる。
「ん？　銃声か！？」
謎の音を感知した巧は、かすかな音を頼りにデパート内を捜索、そして、音のする場所を見つけた。工事中と書かれさえぎられたフロアだった。
「工事中？　工事の音じゃないよな……。それに、このやな感じ、前にも……」
得体の知れない感覚を覚えた巧は、工事中のフロアへと足を運んだ。

〜〜〜〜〜

――どこか。

「……」
無言で銃を構え、走る謎の少女。追われているのは、あの白い生き物だ。
「はぁ……はぁ……！」

「……助けてっ……！」

〜〜〜〜〜

――ＣＤショップ。

まどかとさやかはＣＤショップで音楽を聴いていた。

「「……」」

音楽を夢中で聴いていたまどかとさやか。だが、突然音楽とは違う音声が聞こえてきた。

（助けて……）

「えっ？」

まどかははっとする。空耳かと思っていたが、再び同じ声が聞こえてくる。

（助けて……助けてまどか！）

さやかや周りには聞こえてはいないようで、誰一人その声には反応しない。だが、空耳ではないのは確かだった。その声は、まどかに助けを求めていたのだから。

「ん？　ちょっと、まどか！？」

突然店を飛び出したまどかに気づいたさやかもヘッドホンをはずしまどかを追いかけた。

「ここ……！？」

まどかは声のする方向へと歩いていると、そこは工事中である場所であった。恐怖心はあったものの、助けを求めている声をほおって置けず、まどかは工事中のフロアに足を踏み入れる。

～～～～～

「確か、この辺りから……」
ここに足を踏み入れてからあの声は途絶えてしまった。しかし、まどかには分かる。声の主は、今も助けを求めていることを。
すると、突然上からガタガタを音が聞こえ、天板が外れる。すると、何かがどさっと音を立てて落ちてきた。傷だらけの、白い生き物だ。
「ハァ……ハァ……」
白い生き物はかなり弱っていた。
「もしかしてあなたが……酷い怪我！　早く手当てしてあげないと！」
「その必要はないわ」
向こうからから誰かがやってくる。だが、まどかには誰なのかすぐにわかった。黒髪の少女、暁美ほむらだったのだ。しかも、夢で見た時と同じ、紫色のセーラー服のような格好、左腕に灰色の盾を装着している。
「まさか……ほむらちゃんがやったの！？」
「私がやろうと誰がやろうと関係ないわ」
「そんな……酷いよ！！」
「鹿目まどか、忠告するわ。そいつから離れなさい」
ほむらは無表情で告げる。だが、まどかはなみだ目になりながらも白い生き物を抱きしめ、それを拒む。
「駄目だよ……この子が死んじゃう！　それにこの子、私に助けを……」
「……そう。仕方ないけれど……」
そう言って、ほむらはまどかに近づく。ジャキッっと音を立て、銃口を向けながら。無表情がさらに恐怖心を掻き立て、ほむらが一歩、また一歩とこちらに近づくたびに、まどかの心には恐怖が湧き

出てくる。動きたくとも、動けない。このまま、この子を奪われちゃうのかな……？　まどかがそう思ったその時、白いけむりがほむらを包み込んだ。

「まどか！　こっち！」

そこにいたのは、消火器を持ったさやかだった。まどかはようやく動けるようになり、まどかは白い生き物を抱いたままさやかと一緒にその場を逃げる。その間さやかは空になった消火器をほむらに投げる。それは盾で防がれたが。

「ゲホッ……美樹さやか……！」

ほむらは表情（かお）を歪めて歯軋りする。

ほむらがまどか達の後を追おうとする。が、周りが突然歪みだした。

「くっ！　こんなときに！」

それは紛れも無く、魔女の結界であった。

～～～～～

「！　これはっ！」

巧もまた、結界が張られているのに気づく。もっとも、巧は既に魔女と戦闘していた為驚くことはない。おそらく巧は魔女や使い魔とも戦えるだろう。

ただ……『ファイズギア』を持っていれば（……）の話だが。

「くっそ～！　こんなことならアタッシュケースも持ってくんだった！」

なんと、巧はファイズギアを持ち歩いていなかったのだ。現在ファイズギアの入っているケースは駐車場に置いてきたオートバジンに乗せていた。無論、盗難対策はしてあるが。

「とりあえず、早く脱出しねぇと……ってあれは！？」
――時間を少し巻き戻して……。
「何なんだよあの転校生！　今度はコスプレで通り魔っての！？
てかまどか、その人形みたいなの何！？」
さやかが走りながらまどかに問いただす。
「わからない……でも、この子が助けを……！」
「あーもう！　なんなんだこのアニメな展開はぁ！」
話しながら逃げていると、突然周りの景色は歪みだした。
「あ、あれ？　非常口は？　」
「景色が変わってく……！？」

見る見るうちに景色が一変。奇妙な空間へと変わっていく。
「え？　何これ！？　ここどこ！？」
綿のような何かが現れた。カイゼル髭を生やした、不気味な怪物。
『クフフッ』
「ま、まどか……。これって夢だよね？　夢なら早く起きてよぉ！！」
「さやかちゃん……怖いよお……」
まどかとさやかはそのまま座り込んでしまい、綿もどきにあっという間に囲まれてしまった。
『クヒヒヒ』
綿もどきが不気味に笑い、襲い掛かってきた。まどかとさやかは、涙をこぼしながら叫ぶ。
「「いやああぁぁぁぁぁぁっ！！」」
その時だった。誰がこちらに走ってきたのだ。それはもちろん……、

「おりゃあああ！！」
乾巧であった。巧はとび蹴りを綿もどきに食らわせ、綿もどきは動きを止めた。蹴られた綿もどきは吹っ飛ばされ、壁に激突していた。
「ふえ？」
「あんた……一体」
「俺は乾……っと、その前に逃げるぞ！　早く立……」
巧が立てと言おうとした瞬間、綿もどきの突進を食らい派手に吹っ飛び、積み上げられた箱にぶつかってしまった。
「ぐはぁ！」
「乾さん！」
まどかとさやかが駆け寄ろうとするが、恐怖が肉体を支配し動くことが出来なかった。しかし、ガララと音を立てて、巧が立ち上がる。
「おもしれぇじゃねぇか……」
巧は落ちていた鉄パイプを広い、綿もどきに立ち向かう。巧は鉄パイプを振り回し、綿もどきを叩きつける。しかし、見た目が綿なだけにやわらかいようで、ダメージは少なかった。
「くそっ！　ベルトさえあれば……」
「乾さん後ろ！　危ないっ！」
まどかの声に反応し後ろを振り向くが、綿もどきは巧の頭を食らおうとその口を開けていた。このまま巧が食い殺される、誰もがそう思った矢先だった。その綿もどきが、光弾と共に吹き飛んだのだ。
「危なかったわね」
今度はまどか達と同じ制服の黄色い髪の少女が現れた。それはもちろん、巴マミだった。
「もう大丈夫よ。ありがとう、キュゥべえを助けてくれて。その子

は私の大切なお友達なの」
「あ、ありがとうございます……。あの、あなたは……」
「そんなことより……来るぞ！」
いつの間にか巧がまどか達の側に居り、巧が綿もどきがこちらに来るのを知らせる。しかし、マミは臆せずに前に出ていった。
「悪いけど、自己紹介の前に一仕事させてもらってもいいかしらっ！」
マミはソウルジェムを取り出し、それを掲げた。
「お前、まさ……うおっ！？」
巧が何かを言いかけた瞬間、黄色のまばゆい光がマミを包み込む。そして、マミの姿が変わっていく。白い服、胸元の黄色いリボン、こげ茶のコルセット、茶色のミニスカート。そしてどこかの国の人が被っていそうな帽子。
「姿が変わった！？」
さやかが驚く。そして、巧は心の中で呟いていた。
（まさか……あれが『魔法少女』！？）

「行くわよ！」
マミは白いマスケット銃を召喚、それを綿もどき……もとい使い魔に向けて発砲する。撃っては持ち替え、撃っては持ち替えの繰り返し、使い魔はあっという間にその数を減らす。
「すごっ……」
「かっこいい……」
さやかはその戦いに圧倒さて、まどかはマミの姿に魅了されていた。先ほどの恐怖心など、もうどこにも無かった。巧は黙ったまま、その戦いを見ていた。おそらく長年戦っているのだろう。戦いに慣れている……いや、慣れすぎているというのが巧の思考だろう。
そしてマミは飛び上がり、大量のマスケット銃を召喚した。
「これで最後よ！」
マミは遠隔操作で大量の銃を一斉発砲。使い魔達は文字通り蜂の

巣、全滅した。マミが地に降り立つと同時に、歪んだ空間が元に戻っていく。そして、マミは元の姿に戻る。
「ふぅ、あなた達大丈夫かしら」
「あ、あの……」
「ああ、私は巴マミ、あなた達と同じ見滝原中学の三年よ。あなた達は？」
「私、2年鹿目まどかです！　それで、こっちは友達の」
「同じく2年、美樹さやかです！　よろしく、巴先輩！」
「マミでいいわ。それで、あなたは？」
「俺は乾巧……まぁ色々あってここにいる」
巧は自分の名前だけを教え、あまり詳しいことは言わなかった。言えないというのが正しい答えだが。
「じゃあ自己紹介が終わったところで……。そろそろ出てきたらどうかしら？」
「「「！？」」」
マミが後ろを振り向き、3人もマミの後ろを見る。そこには、暁美ほむらの姿があった。
「ほむらちゃん……」
「まさかあいつも……！？」
「転校生……っ！」
まどかは驚き、巧は彼女も魔法少女かと思い、さやかは歯軋りをしている。無論、巧のそれは当たっているようだが。
「あなた、学校じゃ結構有名になってたわよ、暁美ほむらさん。魔女なら逃げたわ。しとめたいならすぐに追いなさい？」
「別にいいわ。私が用があるのは……」
「飲み込みが悪いのね……見逃してあげるって言ってるの」
マミはほむらがキュゥべえを傷つけたことを察知していた。そして今、眉間にしわを寄せたマミがほむらに対して送っているのは、明らかな、殺気に近い敵意だった。まどか達は後ろから見ていたため、その表情も、敵意も感じていなかったが、巧のみがそれを感知

していた。
　ほむらは振り向き、表情を変える。無論それは誰からも見えることは無かったが。そして、ほむらはその場を去る。ただ一人、巧は何かを察知していたのか、表情は、とても複雑なものになっていた。

「さ、キュゥべえの傷を治してあげなきゃ。鹿目さん、キュゥべえを横にしてくれないかしら」
「は、はい」
　まどかはゆっくりとキュゥべえをおろし、横たわらせた。
「はぁ……」
　マミ横たわったキュゥべえに両手をかざす。すると両手が黄色に光り、キュゥべえの傷が癒えていく。そして光が消えると、キュゥべえの傷は完治、４足で立ち上がった。
「ありがとうマミ。助かったよ！」
「「うおぉっ！？　喋ったぁ！？」」
　さやかと巧が驚いた。
「キュゥべえ、お礼なら鹿目さん達に言って。彼女達が助けてくれたのよ」
「わかったよマミ。鹿目まどか、美樹さやか、乾巧、皆ありがとう！」
「別にいいよお礼なんて……」
「あたしほとんど何もやってないしね」
「俺にいたってはよく分からん」
　３人とも異なる反応をする。
「それでね、まどか、さやか！　実は、今日はお願いがあって来たんだ！」
「「お願い？」」
　まどかとさやかはきょとんとしていた。そして、キュゥべえは、運命の言葉を告げる。

「僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ！」

それは希望の光か。または絶望の闇か……。捻れた歯車（うんめい）は、ここから幕を開けた……。

Chapter 1 ends.
Followed by Chapter 2.

――――――――――――

【第2章予告】

Open your eyes for the next 55☆MAGIKA！

「魔法少女体験コースってとこね」

「紅い……閃光」

「俺は元アルバイトさ。クリーニング屋のな」

「誰かの為に、願いを使っちゃ駄目なのかな……」

「止めなさい！　巴マミ！」

「私、もう何も怖くない……！」

第2章【孤独との葛藤、魔法少女体験コース編】

「「マミさぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」」

「仇は討つぜ……マミ」

絶望(やみ)を切り裂き、希望(ひかり)をもたらせ！

To Be Continued.

第6話（後書き）

巧「俺……かっこわる……ｏｒｚ」
マミ「まぁまぁ……」
作者「さて第2章ですが、作者の都合で更新遅いと思います」
まどか「9月のはじめには速度が戻ると思います。皆それまでまっててね！」
さやか「次回、第7話タイトル未定！多分魔法少女が何かをマミさんが教えてくれる回！」
マミ「……というか、次章予告あきらかに私がやばいんだけど……助かるのよねぇ！？」
作者「……」
マミ「……もう、死ぬしかないじゃない！」
全員「「「やめろぉぉぉぉぉぉっ！！」」」

――戦っても、生き残れない！

杏子「不吉なことゆうなぁぁぁ！！」
巧（俺とこいつが突っ込み役になってる件について）

外伝【幻想（ゆめ）】

それは、もうひとつの幻想（ゆめ）……。

巨大な『何か』がそこにいた。逆さまのてるてる坊主のような巨大な『何か』。それを泣きながら見つめる少女がいた。黒髪の魔法少女、暁美ほむらだった。

「どうして……どうしてこうなるの！？」

彼女の傍らには冷たくなった大切な人が横たわっている。

「『――』の力でも倒せないなんて……」

ほむらは、その人の顔を見る。そして、盾を可動させようとした、その時だった。紅い光が、『何か』に向かっていくのを……。

「紅い……閃光……」

それは、姿を変えたかと思えば、突如姿を消し、現れると今度はその全身を紅く染め、なにやら巨大な武器で立ち向かう……。

「何……なんなのこれは……？」

そして、暁美ほむらは目覚める。

「……また駄目だった……」

ここは病室。ほむらは今日退院し、数日後に復学する予定だ。ほむらは自身のソウルジェムを取り出す。すると、ほむらの目が紫色に光る。ほむらは近眼であり、魔法で視力を矯正したのだ。

「今度こそ……」

そう言って、暁美ほむらは病室を出た。

「何が、紅い閃光よ……幻想(ゆめ)なんて、もういらない。『――』を救えるのは、私だけ……邪魔をするものは、全て消す……！」

たとえ、それが『――』の大切なものだとしても……。

そして、ほむらは見ることとなる。数々のイレギュラー、そして、紅き閃光との出会いを……。

それは、もう少し後の話……。

「私は何度でも、繰り返す――」

～Ｆｉｎ～

外伝【幻想（ゆめ）】（後書き）

はい。というわけでかなり短かったですが、若干ほむら視点でやりました。
ほむらは話の展開上まだくわしく書けませんし；　てか確実に蛇足でしたね；
……まぁ、次回から第2章開幕です。皆様、お楽しみください！

追記
感想受付を無制限にしました！

第7話（前書き）

啓太郎「たたたたっくん！　ファイマギのユニーク数が４０００を越えたよ！」
巧「それは本当か！？」
マミ「ＰＶも２００００超えたし、これからが楽しみね」
さやか「ま、そんなわけでファイマギついに連載再開だぁ！！」
作者「というわけで前回のあらすじ！」
・まどマギサイドと巧接触！
・巧かっこわる！
・マミさんマジ素敵
・ほむら敵対？
・まどかとさやか、キュゥべえに勧誘される！
巧「俺マジ不憫」
出番なし「「「こっちに比べたら優遇されてるよ！」」」
杏子「今回からファイマギ第２章だ！　派手に行くぜ！」
さやか「あ……アンクぅぅぅ！！」←オーズ最終回見た
杏子「誰がアンクだ」
作者「感動の最終回でしたね」

第7話

「はぁっ！」
黄色い少女、マミが舞う。白い銃が怪物を射抜く。その優雅な姿にまどかは惹きつけられていた。恐怖などはとうに消えていた。
「ふぅ。大丈夫だったかしら？」
戦いが終わり、マミが地に舞い降りる。自分に向けられた笑みに、まどかの心は打ち抜かれ……？

「ふえ？」

小鳥のさえずりが聞こえる。朝日が眩しい。
「はぁ……また変な夢……」
まどかはため息をつく。しかし、その目の前に……。
「やぁ、おはようまどか！」
昨日助けた、キュゥべえがいた。
「……夢じゃなかった……」

第7話【運命の始まった日】

「昨日は帰りが遅かったんだってな」
「うん。先輩も家にお呼ばれしちゃって……」
「まあ、門限とかうるさいことは言わないけどさ。晩メシの前には一本入れなよ」
まどかはいつものように母、詢子と歯を磨きながらの話をしていた。その横で気持ちよさそうにお湯に浸かっているキュゥべえがいる。が、詢子は気づいていない。いや、見えていないのだ。
キュゥべえは一部の人間しか認識できないらしく、まどかはその一部であった。まどかは、昨日の出来事を思い出す……。

～～～～～

あの後、まどか達はマミの家に向かっていた。魔法少女について話すつもりらしい。そこで、巧も同行していたのだった。巧はオートバジンを押しながら歩いていた。

「それにしても、まさか男の人にもキュゥべえが見てるなんて……初めてだわ」

「それは僕も同じだよマミ。例外以上の例外だ」

マミとキュゥべえが話していた。それを聞いて巧は疑問を浮かべる。

「お前は男には見えないのか？」

「正確には、素質のある少女にしか見えないんだよ。もちろん、例外もあるんだけどね」

巧はふうんと、まどかの方を見る。

（……なんだ？　どっかであったことあるような……）

「ちょっと、何まどか見つめてんだよぉ。はっ！　まさか、そういう性癖（やつ）！？」

「そんな趣味はない」

さやかのロリコン疑惑を一蹴する巧。それを見て、まどかはくすりと笑っていた。

「あの、巧さん。さっきはありがとうございました！　もしあの時助けてくれなかったら今頃……」

「まぁ、あんまかっこよくはなかったけどねぇ～」

「悪かったな。かっこ悪くて」

さやかの嫌味に眉間にしわを寄せる巧であった……。

気づけば、マミの住むマンションの前に来ていた。巧はオートバ

ジンを駐車場に残し、アタッシュケースを持ってマミ達の後を追う。

「遠慮しないで入ってね」

「「お邪魔しまーす！」」

「邪魔するぜ」

マミは部屋のカギを開け、まどか達を部屋の中に入れる。

「わぁ……綺麗な部屋」

「おぉ～完璧じゃん」

ややシンプルながら、整頓され落ち着いた雰囲気の部屋。まどかとさやかは目を輝かせる。巧はあることに気づく。

「……にしても、なんか広い気がするな」

「私、一人暮らしみたいなものですから……」

マミはその後は言わなかった。言えないこともあるのだろう、巧はそう思って深く追求はしなかった。

「……あ、ちょっと待っててね。今紅茶とケーキを持ってくるわ」

そう言ってマミは台所に向かった。

「おお！　マミさんやっさしい！」

「あ、俺は紅茶いらないからな」

巧は猫舌なので紅茶を遠慮する。気を使わせたくないのもあるが。

「皆どうぞ。乾さんには紅茶の代わりにミルクを持ってきました」

ほのかに暖かい、ぬるめのミルクだ。

「おお、悪いな」

マミはそうなら言ってくれればよかったのにを呟くが、それは誰にも聞こえなかった。

「このケーキ、おいしい」

「ん～！　めちゃうま！　最高っすマミさん！」

「……確かに」

「ふふ、喜んでくれるとうれしいものね」

三人の反応を見てマミは微笑む。喜ぶ顔を見て心が落ち着くのだろう。マミにとっては久しぶりに感じるものだった。

（マミさん！）

もう味わえるとは思えなかった感情。もう取り戻せない過去の記憶が蘇り、マミの目が潤む。

「……マミさん？」

まどかが不安そうにマミを見つめていた。それに気づいたマミは慌ててなんでもないと返す。

「さ……さて、そろそろ本題に入りましょうか。二人も魔法少女としてキュゥべえに選ばれた以上、人事じゃないものね。ある程度の説明も必要でしょ？」

「ふっふっふ、何でも聞いてくれたまえ」

「さやかちゃん、それ逆……」

さやかにまどかが突っ込む。

「俺もいいのか？」

巧にキュゥべえが答える。

「君は個人的に興味があるんだ。ぜひ聞いて欲しいね。それに、君のことも知っておきたいんだ」

キュゥべえが巧を見つめる。その瞬間、巧は異様な感覚を覚える。キュゥべえの瞳に何かを感じ取ったのだろう。

（こいつ……一体なんなんだ……？）

そんな巧をよそに、マミは黄色い卵型の宝石を取り出した。

「これは『ソウルジェム』。キュゥべえに選ばれた女の子が、『契約』によって生み出す宝石よ。　魔力の源であり、魔法少女である証でもあるの」

「マミさん、その『契約』ってなんですか？」

さやかの疑問にマミではなくキュゥべえが答える。

「僕は、君達の願い事をなんでも一つだけ叶えてあげられるんだ」

「「なんでも？」」
まどかとさやかが声をそろえて言う。
「そう、なんだって構わない。どんな奇跡だって叶えてあげられるよ」
「えぇ！？　それって、金銀財宝とか不老不死とか……満漢全席とか！！？」
「さやかちゃん、最後のはちょっと……」
ボケるさやか、それに突っ込むまどか。巧は黙ったまま、キュゥべえのそれを聞いていた。そして、キュゥべえは続ける。
「でも、それと引き換えに出来上がるのが『ソウルジェム』なんだ。この石を手にした者は、『魔女』と戦う使命を課されるんだ」
まどかとさやかは、聞きなれない言葉に表情を曇らせる。
「その、魔女ってなんなんですか？」
「魔法少女が希望を振りまく存在なら、魔女は絶望を振りまく存在。魔女は人の心の闇に取り付いて徐々に精神を蝕んでいくの」
「「……」」
まどかとさやかは息をのむ。
「原因不明の事件や事故の殆どは、実は魔女によって引き起こされているものなのよ」
「でも、なんで魔女は世間に知られてないんですか？」
さやかがマミに聞く。
「魔女は普通の人間には見えないの。それに普段魔女は結界の奥に潜んでいるのよ」
「結界って、あの変な空間ですか？」
今度はまどかが聞いてきた。
「そう。普通の人は結界の中に迷い込んだら、二度と出られないわ。あなた達、結構危ないところだったのよ？」
「うへぇ……じゃあ巧が助けてくれてても、マミさんがいなかったらやばかったんだ……」
（俺は別に問題なかったんだけどな。ベルトが無くても……）

さやかの言葉に聞きながら、巧はそう思いながら自信の右手を見る。
（……ていうか、何で呼び捨てなんだ？）
そして、巧は流したものを心の中で突っ込んでいた。
「……」
「どうしたのまどか？」
何かを考え込んでいるまどかに気づいたさやかは、まどかに声をかける。
「うん……どうしてほむらちゃんはキュゥべえを襲ったのかなって……」
「そのことなんだけど、おそらく暁美さんは新しい魔法少女が増えることを恐れているのよ」
「え？　魔法少女同士、仲間じゃないんですか？」
「それがそうでもないの。魔法少女達は一人一人、自分の縄張りを持っているの。新しい魔法少女が生まれれば、当然自分のテリトリーが減ってしまうわ。それに、魔女を倒すとそれなりの見返りがあるから、それ目当てで魔法少女同士が対立することも珍しくはないわ」
「その、見返りってなんなんですか？」
「魔女の卵、『グリーフシード』。魔女がまれに持っているの」
「「魔女の卵！？」」
まどかとさやかは魔女の卵を聞き驚く。キュゥべえは補足を付け足す。
「『グリーフシード』は魔力を回復させるアイテムなんだ。それを巡って魔法少女同士で争ったりするんだ」
キュゥべえの回答に、巧は納得する。どおりで話したくなかったわけだ、と。
「じゃあ、持ってない魔女は……」
「『使い魔』と呼んでいるわ。使い魔は大抵は放置されているの。グリーフシードを孕（はら）むまで。……そう、人を殺すことによって」

マミのその発言にまどかは顔を青ざめ、さやかは眉間にしわを寄せて怒りをあらわにする。
「そんな……」
「……そんなの許せないですよ！　そのあいだ、人がどうなってもいいってことですか！？」
「むしろそれが普通なんだ。だから、マミみたいに使い魔も狩る魔法少女は珍しいんだ」
「もちろんそれは人として許されるものではないわ。でも、それは魔法少女が生きていくためには必須なものなの」
「でも……だからって！」
怒るさやかに、巧が問いかける。
「さやかつったっけ？　お前、肉食動物に動物殺しって言うのか？」
「えっ？　それは……」
「もちろん、俺はそれを正しいって言うわけじゃない。でも、生きるためにはそういうことも必要ってことだ。魔法少女になるなら、そういった罪を背負う覚悟がないと駄目だってことだろ」
巧の正論に、さやかは黙り込んでしまった。
「それに……俺は契約とかは反対だな」
「どうしてですか？」
まどかが聞く。
「『願（ゆめ）い』ってのは、自分でかなえるための目標だろ。それを、戦う指名を背負ってまで叶えたいとは、俺は思わないな」
「「『願（ゆめ）い』……」」
巧の発言に、二人は考える。自分達に、そうまでして叶えたいものがあるのか、と。
「巧さんの言うことも正しいわ。契約しない、そういう選択肢もあるわね。それに、魔女との戦いは常に命がけ、命の危険だってあるもの」
「でも……そうです、よね」
まどかはうつむいてしまう。

「まぁ、すぐに結論をだすことはないわ。これから、ゆっくり考えればいいじゃない」
マミはそう言った後、何かを思いついたのか
「そうよ。提案があるんだけれど……しばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」
「「え？」」
「まぁ、『魔法少女体験コース』ってとこね。私の戦い方とかを見て、魔法少女の仕事を経験してから答えを見つけてもいいんじゃないかしら」
「おい、子供だけでそんな危険なことさせられるかよ」
マミの考案に巧が反対する。
「……乾さん、これは二人に聞いているんです。あなたに権限はありません」
マミの謎の威圧感に、巧は押されかける。
「……だったら、大人（おれ）も連れていけ。それならいい」
「えぇ～？　巧、マミさんみたいに戦えるのぉ？」
「なめんなよ。ちゃんと準備すれば俺だって戦える」
ふぅ～んと小ばかにしているさやかをよそに、巧はマミを見つめる。
「……大丈夫なんですか？　これは一般の人には危険で」
「少なくともこいつらもまだ一般人だし、俺はこいつらよりは力になれる。それにキュゥべえ、こいつも俺のことを知りたいだろうしな」
「……そうだね。マミ、僕からも頼むよ」
「……キュゥべえが言うなら……」
キュゥべえには反論できないのか、マミも渋々納得する。
「じゃあ今日はもう遅いし、これまでにしましょうか」
マミが手を叩き、その日は解散となったのであった……。

～～～～～

「ねえママ。もし、もしもどんな願いでも一個叶えられたら、何をお願いする？」
「う～ん？　そうだなぁ……あたしだったら家族の幸せ……かな？」
意外な答えにまどかはきょとんとする。
「そんな小さなことでいいの？」
「小さなことが一番大切なのさ。それに、願いにでかいも小さいもないだろ？」
詢子はまどかを見て笑う。それを見て、まどかも微笑んだ。

「うん……そうだね」

「……まぁ、でかいこと頼めっつんだったら役員を二人ばかりヨソにとばしてもらおうかな」
「へ？」
詢子の言葉に、まどかはあっけにとられてしまう。
「はっはっは！　ま、冗談は置いといて、そろそろ一朝メシ食わないとな」
そう言って、詢子はリビングへと向かっていった。冗談とは言っていたが、その目は明らかに本気だった。
「……やっぱり、ママはママだなぁ……」

～～～～～

場所は変わり、マミのマンション。

「じゃあ、留守番宜しくお願いしますね。乾さん」
巧はなぜかマミの家に泊まっていた。実はあの後……。

「ところで、乾さんはどこに住んでいるんですか？」
「あぁ、用事があって見滝原に来たんだ。確かポケットにホテルの番号とかが……あれ？」
巧はポケットを探るが、メモがないことに気がつく。
「い、いつ……まさかあの時にっ！？」
巧は魔女の結界内で派手に吹っ飛ばされたのを思い出した。
「もし結界内でなくしてしまったとしたら……もう無理ね」
「うっそだろぉ……」
マミの言葉がとどめとなり、巧は落ち込んでしまった。ホームレス確定だ、そう思った時だった。
「あの……もしよかったら、ここに泊まりますか？」
「「マミさん！？」」
マミの言葉に、まどかとさやかは驚く。
「ちょ……マミさん相手は大の男ですよ！？　あんなことやこんなことされちゃいますよ！？」
「お前は俺をなんだと思ってるんだあああ！！」
さやかの発言に、切れ気味に突っ込む巧。その後、結局巧はマミの家に泊まることになったのであった。

「はぁ……マジでかっこわる……」
自分のふがいなさに落ち込む巧なのであった……。
乾巧、見滝原にて現在いいとこなし。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第7話（後書き）

巧以外「「「合掌」」」
巧「うがあああああああ！！」
さやか「ま、いつかかっこよくなるよ」
作者「まぁ、まどマギクロス系ってクロス側の人がマミの家に居候してことも多いし、気にするな」
杏子「しっかし、ブランクがたたって若干文章力落ちてんな」
作者「うん、なんとなくぐしゃぐしゃなのは気づいてた。それよりもさぁ……」
全員「「「ん？」」」
作者「おりこ☆マギカ読みたい」
全員「「「買えば？」」」
作者「……置く場所ない」（ＴＴ）
まどか「うん……こっちも」
全員「「「合掌」」」
作者「あ、無制限で感想書きこめるようにしたので、皆さんお気軽にどうぞ！」
ほむら「さて、次回第８話【幸せと不幸、二人の思い】。次回も乾巧の影は薄いわね」
巧「止めろ……俺を呼ぶなぁぁぁぁ！！」
さやか「どこのアギト！？」

第8話（前書き）

巧「今回俺の出番少ないみたいだな」
まどか「それにしても、フォーゼ……」
さやか「どうしてこうなった（田中的な意味で）」
ほむら「ま、あの骸骨はほっておけばいい」
マミ「それでは、第8話スタートよ！」

第8話

『魔法少女と同居ですかぁ。変なことしてないですよねぇ～？』
「そんな性癖（しゅみ）はないっつーの！」
マミが家を出てから少ししてファイズフォンが鳴り、その相手はスマートレディーであった。昨日もさやかに同じことを言われ、巧は心の中でため息をつく。
『それで、これからどうするんですか？』
「とりあえず、その『魔法少女体験コース』ってのを見ていこうと思う」
数秒の沈黙。
『そうですか……あ、むやみに変身しないでくださいね？　どうやら魔法少女達がオルフェノクを警戒しているようですから。下手をすれば乾さんまで狙われる可能性もありますから』
「ああ、わかった」
ブツッと通信が切れ、巧はファイズフォンを折りたたんだ。
「ま、マミなら一人でも大丈夫だとは思うけどな……けど、なんだ？　この変な感じは。マミ一人にやらせたら、まずい気がするな……」
巧には『魔法少女体験コース』には何か裏があるような気がしてならなかった。

～～～～～

時はさかのぼり、昨日の夜。その頃、巧は既に寝ていた。
「キュゥべえ、あなたに言われた通りに『魔法少女体験コース』を発案したけれど、大丈夫なの？」

「問題ないさ、マミが頑張ればいいんだから。それに、マミもまどかやさやかに魔法少女になってほしいんだろう？」

「っ！！　それは……っ！」

「マミの行動によっては、まどか達がマミから離れていくことも考えられるんだよ？」

「そ……そんなのいやよ！　一人ぼっちは……」

「だよね？　だから、……分かったかい？」

「……分かったわ……」

「いい子だ、マミ」

～～～～～

少なくとも、巧の予感は当たっていた。ただそれを巧は知らない。

「……暇だなぁ……」

とりあえず、この暇な時間をどうしようか、そう考える巧であった。

第８話【幸せと不幸、二人の思い】

いつもの通学路。さやかと仁美が歩いていた。

「おっはよー！」

まどかの声が後ろから聞こえ、二人は振り向く。

「おはようございます鹿目さん」
「おっすまど――うぇぇぇ！？」
仁美が普通にあいさつを交わすが、さやかはなぜか驚いていた。なぜなら、まどかの肩にはキュゥべえが乗っていたからだ。そんなさやかを見て、仁美はきょとんとしていた。さやかのまどかの側に駆け寄って耳打ちをする。
「……やっぱり、あたし達にしか見えないのか」
「そうみたい。ママにも見えてなかったし」
「なんで巧は見えるかなぁ。実は男装女子だったり？」
ひそひそと話している二人を見て、仁美は首を傾げていた。
「お二人とも、どうかしましたの？」
「え？　あ、いやいや何でもないから！　ほら、行こ行こ！」
さやかはごまかしながら、仁美の背を押して再び歩き出した。仁美は不思議そうに思いながらも、さやかに押し流され歩いていた。
＜あ、あと頭の中で考えただけで会話が出来るみたいだよ？＞
「うぇい！！？」
突然頭の中にまどかの声、テレパシーが響き、さやかは再び驚く。さやかは慌ててまどかの方へ振り向き、さやかも思考をまどかに向けてみる。
＜あーテステス……ほんとだ。あたし達いつの間にそんなマジカル能力が！？＞
＜いや、今は僕が間で中継しているだけさ＞
キュゥべえがテレパシーに入り、さやかに説明する。
＜なんか変な感じだなぁ＞
さやかは納得しつつ再び歩き出す。流石に変に思ったのか、仁美は不審な眼差しで二人を見る。
「お二人とも、さっきからどうしたのですか？　しきりに目配せしたりして」
「え？　あ、いやぁこれは……」
「う～ん……」

二人が気まずそうまた目配せしているのを見て、仁美にある疑惑が生まれた。
「ま、まさか……私が帰った後でお二人の仲が急接近するようなことが……！？」
「え、えーと……その、違うんだって！」
流石に仁美に魔法少女のことは話せず、さやかははっきりとした反論が出来なかった。しかし、それが仁美の疑惑をより立たせてしまった。
「い、いけませんわそんなこと……女性同士で……」
「あ、あの。仁美ちゃん？」
様子のおかしい仁美に、まどかが近寄ろうとするが、仁美はカバンを落として振り向いてしまう。

「それは……それは禁断の恋ですのよぉぉーー！！！」

そして仁美はそのまま叫びながら走り去ってしまった。
「仁美ちゃん鞄忘れたまま言っちゃった……」
「まったく、あたしとまどかがそんな関係になるわけがないじゃん」
「……え？」
「は？」
さやかの発言にまどかが過敏に反応した。
「さやかちゃん……私をお嫁さんにしてくれるんじゃなかったの？私のことが好きなんじゃなかったの？」
まどかの頬が赤くなる。そして、その目は潤んでいた。
「え？　あの……まどか？　あたしはあくまで友達として好きなわけで……」
まどかの予想外の反応に、さやかは戸惑っていた。
「そうだよね……女の子同士じゃ駄目だよね……それに、さやかちゃんには想い人（上条くん）がいるもんね……」
まどかは今にも泣きそうになっていた。

「いやいや恭介は関係ないでしょ！？　ていうか……嘘でしょ？
まどか……あたしのことをっ！？」
「ううん、いいの。私のこの恋は元々届くものじゃないっで……ひぐっ……分がっでだがら……うえええぇ……」
ついに、まどかは泣き出してしまった。
「えええええ！！？　ちょっ、泣かないで！？　ごめん！　よくわかんないけどごめんなさいいいいっ！！」
もはやさやかの頭の中は混乱、泣いているまどかを慰めることすら出来なくなっていた。
「う、あ、うぅ……ごめんまどかぁぁっ！！」
さやかが考えたすえ見つけた答えは、まどかを抱きしめることだった。さやかはまどかに抱きつこうとする……が。

「あら……ぶっ！？」
まどかはそれを避ける。「スカッ」という効果音が似合うくらいに。さやかはそのまま倒れこんでしまった。
「えっへへー、嘘だよーだ！」
「……ふぇ？」
今さっきまで泣いていたはずのまどかは、けろっとして笑っていた。さやかは何が起こったのか、何がどうなっているのかわからなかった。ただ、ようやく理解できたのは、騙されたことだった。
「いつもの仕返しだよ！　じゃ、私も先に行くからねー！」
そう言って、まどかも走って学校へと向かっていく。
「……まどかめ、騙したな……。このさやかちゃんに一杯食わすとは……むぅぅゆるさーん！！　……っと。待てえええ！！」
さやかは仁美の鞄を持ってからまどかを追いかけた。

「……許さない」

〜〜〜〜〜

そんなこんなあって只今お昼。昼食の時間である。まどかとさやかは屋上で弁当を食べていた。まどかはキュゥべえにおかずを分けたりしていた。おかずを食べ終えると「きゅっぷい」とかわいらしいゲップをする。

「いやー仁美の誤解解くのは苦労したわー」
「でも、さやかちゃん。ほむらちゃんににらまれてたよね、確実に」
「ああ……確かに」
あの後教室で仁美の誤解を解いた後、さやかは教室に入ってきたほむらに睨まれていた。覚えておけを言わんばかりに。
「……なんかとって食われそうだ」
さやかは身震いを起こす。さやかは空気を変えようと話題を変えた。
「そういえばさ、まどか授業中になんか描いてたよね？」
「え！？　あ、いや、う～ん……」
まどかはなぜか気まずそうにしていた。さやかは怪しく思ったが、とりあえずスルーすることにした。
「ところでさまどか、願い事考えた？」
「ううん、まだ……さやかちゃんは？」
「あたしも全然。ちっちゃい頃はランプの魔神とかを読んで、色々とは考えてたんだけどなぁ……」
さやかは立ち上がり、金網のフェンスに向かって歩き出す。
「欲しい物とかやりたいこととかいっぱいあるけどさ、命がけって考えると、命懸けるほどのもんじゃないなーってさ」
「意外だなぁ。君たちのような年代の娘なら大抵は二つ返事で契約するんだけれど」
キュゥべえは台詞どおり意外そうにさやかに言う。
「まぁ、きっとあたし達がバカなんだよ」
さやかはの金網に手をかける。

「さやかちゃん、それって……」
「早い話、幸せバカ。世の中には、命を懸けてでも叶えたい望みを持ってる人って、大勢いるはずでしょ？　そんな望みが見つからないってことは、その程度の不幸しか知らないってことじゃん。恵まれすぎて、あたし達バカになっちゃってるんだよ」
さやかの表情が歪む。金網が独特の金属音を上げてきしむ。
「なんで……あたし達なのかなぁ？　不公平だと思わない？　こういうチャンスを心の底から欲しいと思っている人は、他にもいるなずなのにさ……」
さやかの脳裏に、ある少年の姿が映りだす。少年はベッドに寝たきりで、窓から景色を眺めている。とても、さびしげな光景だ。
（さやかちゃん……）
その時だった。暁美ほむらが、屋上にやってきたのは……。

「「！」」
ほむらが現れ、まどかはキュゥべえを抱きかかえ、さやかはまどかを自分の背に隠してほむらを睨みつける。
「な、なんの用だよ。まさか、昨日の続きかよ！？」
「どうしよう……今は私達しか……」
＜心配しないで＞
ほむらほ来訪に困惑するまどか達であったが、頭の中にマミの声が聞こえた。まどかとさやかが辺りを見渡す。
＜マミさん……どこに？＞
＜あなた達から見て左側の別錬にいるわ。この距離なら向こうが襲ってきてもすぐに対処できるわ＞
「……いいえ、そのつもりはないわ」
ほむらが静かに口を開いた。キュゥべえを睨みつけながら。
「そいつが鹿目まどかと接触する前につぶしておきたかったけれど、もう手遅れのようだし。……それで、どうするの？　魔法少女になるつもり？」

「そんなこと、あんたに関係ないでしょ！」
さやかがほむらに向かって言い放つ。だが、ほむらは表情を変えずに冷静に対処する。
「あなたに聞いてないわ。鹿目まどか、昨日の話は覚えているわよね？」

（今とは違う自分になろうだなんて、絶対に思わないことね。……さもなければ、全てを失うことになる）
昨日、ほむらが言っていたことだ。
「うん……」
まどかはおどおどしながらも首を縦に振る。
「そう、ならいいわ。忠告が無駄にならないことを祈るわ」
「ま、待って！」
ほむらは振り向いて立ち去ろうとするが、それを止めたのは、まどかであった。
「ほむらちゃんは、どんなお願いで魔法少女になったの？」
ほむらは反射的に振り向く。だが、相変わらずの無表情だったため、ほむらが何を思っているのか察することは出来なかった。ほむらはすぐに振り向き、歩き出した。
「なんだよあいつ……言うことだけ言っといて聞かれたことにはだんまりかよ」
さやかは眉間にしわを寄せながら言う。その一部始終を見ていたマミは考え込んでいた。
（暁美さんの狙いは一体……？）

～～～～～

あれから数時間後、帰りのＨＲが終わり、生徒は部活や帰宅の準備をしていた。まどかとさやかは廊下にいた。

「鹿目さん、美樹さん。今日も一緒に帰りましょうか」
そう言ってきたのは仁美だ。
「ごめんね。今日はちょっと……」
「悪い仁美。あたしも今日は大事な用事があってさぁ、ごめん」
まどかは苦笑いをし、さやかは手を合わせて頭を下げていた。それを見て、仁美は落ち込んだ。
「そうですか……。もう、私が入る余地はありませんのねぇぇー！」
「だぁから！　そんなんじゃないってー！」
仁美は朝のように叫びながら走り去ってしまい、さやかも訂正しろと叫んでいた。
「まったくもー！　仁美の奴！　そんなんじゃないって何度も」
「……え？」
まどかの目が潤む。だが、流石に二度目は通用しなかった。
「もう引っかからないからな」
「あはは……じゃ、行こっか」
そう言って、まどかとさやかは歩き出した。マミとの待ち合わせ場所へと。

〜〜〜〜〜

デパート内のファストフード店。まどかとさやかが到着した。さやかは見慣れないものを背負っていた。

「あら、来たわね」
「遅かったな」
マミと巧が既に来ていた。巧はアイスコーヒーを飲んでいた。巧の側にはあの銀色のアタッシュケースがあった。
「待たせてすんませんでしたマミさん」
さやかが腰を低くして謝る。
「いえ、気にしないで。じゃあ、魔法少女体験コースはじめましょ

うか！」
「「いえーい！」」
まどかとさやかが楽しそうに張り切っている。巧はそんなことで大丈夫なのかよとため息をつく。
「それで、準備はいいかしら？」
マミは三人に聞く。
「準備になってるかは分からないけど、これ持って来ました！」
そう言って、さやかは持っていた包みから、金属バットを取り出した。
「無いよりはマシかと思って！」
「さやかちゃん、気合入ってるね……」
「やる気は分かったからさっさとしまえ。目立つぞ」
巧にそう言われ、さやかは舌をペロッっと出しながらバットをしまう。
「で、巧は？」
「俺は……まぁ、なんとかなる」
さやかにそう言われ、巧はアタッシュケースを触りながら茶を濁す。
（これのことは言えないもんな……）
「それで、鹿目さんは？」
「え、えーと私は……その……」
マミに聞かれ、まどかはそそくさと一冊のノート取り出した。三人は開かれたページを見ると、そこにはファンシーな服装の女の子が描かれていた。その中にまどからしき絵もあった。
「一応、衣装だけでもと思って……」
三人は一瞬静止し……。
「あはははっ！　こりゃあまいった！」
「うふふ」
「……っ」
さやかは盛大に、マミは控えめに笑っていた。一方で巧は、握り

拳で口元を押さえつつも、肩を震わせていた。声を殺して笑っているのだ。
「わ、笑うのはちょっと！　ひどい、かも……」
まどかは顔を真っ赤にさせる。
「いやーまどかはかわいいなぁ！　流石あたしの嫁！」
「ふふっ、その意気込みは素晴らしいわ」
まどかは真っ赤になった顔を隠すようにうつぶせて、ノートをしまった。
「ふぅ、じゃあ第一回魔法少女体験コース、張り切っていきましょうか！」
「「おー！」」
まどかとさやかが盛り上がる中、ただ一人、巧は浮かない顔をしていた。

To Be Continued.

第8話（後書き）

巧「次回はいよいよ魔女との戦闘か」
さやか「てか、サブタイトル変わってたな」
まどか「さりげなく前回の後書きも修正されてるし」
作者「だって、廃屋のくだり書こうと思ったけど長さ的にやめちゃったからさぁ」
マミ「まぁいいじゃない。私の活躍がまるまる1話なんだから！」
全員（（（まぁ、そこが数少ない見せ場だし））））
マミ「……？」
さやか「つーか、まどかが小悪魔な件について」
作者「まだまどマギが明るかった頃だからさ、こういう内に出来るだけ笑えるところを作っとこうと思ったから……」
ほむら「まどかかわいいわまどか……」
巧（「……ゆるさない」って台詞、絶対こいつだ！）
マミ「というわけで！」
巧「次回第9話【呪いの薔薇、正義の銃声】。次回も宜しくな！」
杏子&SL「とぅーびーこんてぃにゅーど！」

第9話（前書き）

前回の555☆MAGIKA三つの出来事！

ひとつ！　巧はマミの家に居候することとなった！

ふたつ！　まどかとさやかは、ほむらから忠告を受ける！

そしてみっつ！　いよいよ、魔法少女体験コースが始まる！

巧「どうしてオーズ風なんだ？」

マミ「なんでもいいじゃない。さぁ、行くわよ！」

まどか＆amp;さやか「「おーっ！」」

第9話

あれから巧達は昨日魔女の出没した場所にいた。
「魔女の捜索は魔女の魔力の痕跡をソウルジェムでたどって行うの」
そう言ってマミは手のひらにソウルジェムを置く。すると、ソウルジェムが淡く輝いた。
「これは魔女の魔力に反応しているの。魔女が近くなるとこの光もつよくなるわ」
「なるほどな。それで魔女の居場所が分かるってか」
「なんか思ってたより地味だなぁ」
「地味だけど大切なことことよ。どうやら、美樹さんはそういうのが嫌いなようね」
「ギクッ！」
図星なのか、さやかは顔色を変えた。
「さやかちゃん勉強苦手だしね」
「ちょ……言うなよまどか！」
黒い笑顔でさやかを見つめながら言うまどか。
「う～ん、思考が弱いとなると、仕事をこなすのは難しいね」
「キュゥべえまでなんだよぉ！！」
まどかの肩に乗っているキュゥべえもさやかを見つめながら言う。
「さやか、お前絶対魔法少女向いてないな」
「ひどっ！？」
巧にまで言われ、さやかはへこんでしまった。
「さ、行きましょ」
マミが歩き出すのを見て、まどか達も歩き出す。巧は後ろをチラッと見た後、マミ達の後を追った。
（……気のせいか？）

第9話【呪いの薔薇、正義の銃声】

外に出たマミ達。空は既に赤く染まり始めていた。巧はオートバジンに乗ってこなかったようで、アタッシュケースを持ったまま歩いていた。
「光、全然かわんないっすね」
さやかがソウルジェムを見ながら呟く。
「取り逃がしてから一晩経ってしまっているからね」
「マミさん、どうして昨日の内に倒さなかったんですか？」
まどかはマミに聞く。
「確かに仕留められたかもしれないけど、あなた達を放っておいてまで優先することじゃなかったわ」
「あうぅ……ごめんなさい」
自分達に責任があると思ったのか、謝るまどか。
「いいのよ」
心優しい真美にさやかはうんうんとうなづいていた。
「うん、やっぱりマミさんは正義の味方だなぁ！　それに引き換え、あの転校生……ホントにむかつくなぁ！」
さやかがほむらの悪口を言っていると、そこに巧が介入してきた。
「そういうな。お前そいつの何を知ってんだ？」
そう言われ、焦るさやか。
「え！？　いや……だってあいつは……」
「仕留められてない、ってことはあいつは魔女を倒さなかってことになる。変だと思わないか？」
「な、何か？」
さやかはまだ理解できていないようだ。巧はため息をつきながら言葉を付け足す。
「それが魔法少女が増えるのを阻止しようとした奴のすることか？
見返りが減るのを阻止するためにキュゥべえを襲っといて、見返りを出す魔女を倒さないって、おかしくないか？」
「あ……！」

さやかはようやく巧の言っていることを理解した。確かに、見返りがほしいのなら、見返りが手に入る魔女を倒さないのはおかしい。それに関してはマミもそうねと呟いていた。
「多分別の理由があるんだろ。お前がぐちぐち言えるもんじゃない」
「……ふぁーい」
若干不満げではあったが、納得するさやか。そんな中、まどかは巧の傍に近寄る。
「巧さん、ありがとうございます」
「ん？　俺なんかしたか？」
「ほむらちゃんの誤解を解いてくれて……。私、ほむらちゃんが悪い子じゃないような気がしてたから……」
まどかはそう言って微笑む。巧はそっぽを向いてあっそと呟く。夕日で赤くなっていたから見にくいが、巧は照れていた。それを見てさやかは素直じゃないなーとにやけていた。
「あ、そういや、魔女の居そうな場所ってあんのか？」
場の空気を変えようと思ったのか、巧がふと思ったことを口にする。
「乾さん、昨日魔女は呪いや災いを振りまく存在って言いましたよね？」
「ああ」
「交通事故や障害事件は呪いによって起きるのかほとんど。だから大きな道路や交差点、喧嘩の起こりやすい歓楽街に潜んでいることが多いんです。それと、自殺に向いていそうな人気（ひとけ）のない場所も」
マミの顔がやや険しくなる。
「それと、病院も気をつけたほうがいいです。弱っている人達の多い病院で魔女に生命力を吸い取られれば、大変なことになりますから」
『病院』、その単語を聞き、さやかの表情は一片。真面目な顔つきになる。
「それって、死ぬってことですか？」

「……そう考えた方がいいわね。だから、そこを重点的にチェックする必要があるの」
マミの言葉に、空気が一気に重くなる。まどかは不安そうにさやかを見つめる。すると、マミのソウルジェムが突如強い光を放った。つまり、近くに魔女がいるということだ。
「魔女！　それもかなり近いわね……！　皆、行くわよ！」
「「はいっ！」」
「ああっ！」
四人は一斉に駆け出した。

〜〜〜〜〜

四人の目の前には小さな空き地にたたずむ古い廃屋ビル。自殺でも起きそうな場所だ。
「いかにも魔女がいそうな場所だな」
巧がそんなことを言うと、まどかが屋上を指差しながら叫んだ。
「あっ！　あそこに人が……！」
三人はまどかの指差す方を見る。そこにはなんと女性の姿があった。。あと一歩前に出れば間違いなく落ちる場所に。無気力に、何かをぶつぶつとつぶやいているようだ。
そして、最悪の事態が起きた。女性が落ちたのだ。マミと巧が走り出し、まどかは悲鳴を上げる。
「くそっ……！」
巧は全速力で走るが、女性を受け止めるには距離が遠すぎる。そんな中、マミは黄色い光に包まれ、魔法少女に変身した。
「私に任せてください！　ハッ！」
すると、マミの胸元の黄色いリボンが何本も伸び、女性を受け止めたのだ。
「よかった……」
「やった！！」

まどかとさやかがマミに駆け寄る。巧も額の汗をぬぐいながら歩み寄る。
「……やっぱり」
マミは女性の首筋を見る。すると、蝶を模したタトゥーのようなものがあった。
「これは魔女の口づけ。これを受けた人は自殺や事故を起こすの」
「もう少し遅かったら魔女に殺されてたってことか」
そういう巧をふと見ると巧はいつの間にか鉄パイプを持っていた。
「巧それどっから！？」
さやかは驚く。
「好きですね……鉄パイプ」
「好きで使うかっ！　落ちてたのを拾ったんだよ！　……で、そいつは大丈夫なのか？」
「ええ、気を失ってるだけ。急いで魔女を倒しに行きましょう！」
女性を安全なところで寝かせ、マミ達は廃屋の中へと入っていった。

〜〜〜〜〜

「美樹さん、乾さん」
マミがそう言うと、バットと鉄パイプに触れる。すると、バットと鉄パイプの見た目がファンシーになった。
「魔力を注いだの。気休めだけれど、身を守るぐらいには役に立つわ」
「すっげー」
さやかはバットが変化したことに興奮しているようだ。一方で、巧はいやそうな顔をしていたが。
「さて、絶対私の傍を離れないでね！　行くわよっ！」
マミは魔力のゲートを作り出し、その中へと入っていった。ここからは魔女の結界、危険な戦場へと赴くこととなる。まどか達は意

を決してゲートをくぐった。

〜〜〜〜〜

結界の中はまるで城の廊下のよう。白い壁、床。シンプルで綺麗だ。だが、これでも魔女の結界、危険な場所に変わりは無かった。使い魔達がマミ達に襲いかかる。マミはマスケット銃を召喚し使い魔を一気に打ち抜く。さやかはまどかを守りながらやって来る使い間達を魔法のバットで殴る。巧は右手に鉄パイプを、左手にはアタッシュケースを持ち、さやか同様まどかを守る。ただ、巧は若干独断行動もあったが。

「えいっ！　こっちくんなー！」

「どう？　怖い？」

「な、なんてことないっすよ！」

たった今までおびえながらバットを振っていたのに、強がるさやか。

「俺は別に怖くない！　それなりに鍛えてるしな！　はっ！」

その一方で、豪快に右手に持っている鉄パイプを振り回す巧。ちなみにアタッシュケースは左手で盾のように構えている。さやかとは違い、積極的に前に出ており、倒した使い魔も多い。だが、やはり使い魔を多く倒しているのはマミだ。流石に魔法少女として長く戦っているだけある。これならば巧が戦う必要はないだろう。

そして、ついに魔女のいる最深部へとたどり着いた。

「見て。あれが魔女よ」

その姿を見て、まどかとさやかは驚く。3メートルを越す巨体で蝶のようなはねを持ち、顔らしきものは半液体状のようであり、薔薇がいくつか咲いている。その名は、『薔薇園の魔女』、その性質は『不信』。

「うっわぁ……グロッ」
さやかの顔は引きつっていた。
「マミさん……あんなのと戦うんですか？」
「マミ、こればかりはきつくないか？」
「大丈夫、負けるもんですか」
そう言って、マミはさやかの持っていたバットを地面に突き刺した。すると、まどか達はバリアに包まれた。
「はぁっ！」
マミが魔女のいる最深部へと降り立つ。すると、魔女が突然怒り、巨大な椅子を投げ飛ばしてきた。マミはそれを跳んで避ける。マミもマスケット銃を大量召喚するが、魔女はその巨体に似合わぬスピードに空中を飛ぶ。そのため中々命中しない。すると、突如鞭のようなものが出現、マミを縛り付けて空中で振り回す。
「う……ぐっ……！」
「「マミさん！」」
「マミ！」
まどかとさやかの悲痛の叫びがこだまする。巧はアタッシュケースを開こうとするが、マミが叫ぶ。
「……大丈夫！」
そう言ってマミは魔女が作った物であろう薔薇園を攻撃、薔薇の花が散っていった。するとどうだろう。魔女はうろたえだした。そう、この魔女は名前通り薔薇園を作っているのだ。マミが現れていきなり激怒したのはマミによって薔薇が荒らされてしまったから。マミはそれに気づき薔薇園を攻撃したのだ。そして、魔女が薔薇園に気をとられている内に脱出した。
「未来の後輩に、あまりかっこ悪いところは見せられないものね！
ハァッ！！」
マミはリボンを出現させ、魔女を縛り付けた。飛べなくなった魔女はそのまま墜落、動けなくなってしまった。そして、マミはリボンで巨大なマスケット銃を作り出す。

「惜しかったわね」
そして、銃に魔力がチャージされ、巨大な光弾が放たれた。
「ティロ・フィナーレ！！」
マミの必殺技『ティロ・フィナーレ』を食らった魔女はそのまま爆発した。マミが地に舞い降りると、魔女の死を哀れむように蝶の使い魔が飛んでいった。マミはどこからか出した紅茶を飲んでまどか達の方を見て微笑んだ。

そして、魔女が死んだことによって、結界も消滅していった。喜ぶまどか達。一安心する巧。そして変身を解き、何かを探すマミ。すぐに探し物は見つかったようで、まどか達に歩み寄る。
「これがグリーフシード、魔女の卵よ」
「これが、見返りって奴ですか？」
「ええ。ほら……」
マミがソウルジェムを取り出した、その時だった。

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
女性の叫び声が聞こえてきた。
「な……何！？」
「もしかして、あの女性（ひと）に何か！？」
「早く行くぞ！　なんかヤバイぞ！」
「ええ、鹿目さん、美樹さん！」
「「は、はいっ！」」
巧が入り口に向かって走り出し、それに続きマミ達も走っていった。

～～～～～

「いや……いやあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「な……なんだよあれ！？」

さやかが見た光景、女性は怯えながら見ていたのは、灰色の怪人だ。
「あれは、こないだの……！」
「オルフェノク！」
「おる……？」
マミが以前あったのとは別もののようで、見た感じはチーターである。巧が『オルフェノク』と聞きなれない単語を発し、さやかはよくわからない表情で巧を見ていた。
「あ……っ！　ほむらちゃんっ！」
「うぐ……がっ、ゲホッ！　はぁ、はぁっ！」
まどかの声に反応してみると、そのには魔法少女の姿のほむらがいた。ただ、ほむらは青白い顔で苦悶の表情をうかべうずくまっており、腹部を真っ赤に染め、左腕で押さえていた。右手には拳銃を握っており、戦っていたことを暗示させる。
「ふひひひひ……」
灰色の怪人、『チーターオルフェノク』が不適に笑っていた……。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第９話（後書き）

さやか「まさかの急展開……だと……！？」
まどか「ほむらちゃんいきなりピンチだよ！？」
ほむら「解せぬ」
巧「これは……フラグだな」
マミ「ええ、フラグね」
作者「次回、第１０話【赤き希望～ＦＡＩＺ～】！」
巧「次回も宜しくっ！！」

第１０話（前書き）

作者「話数がついに二桁だ！」
巧「そしてまさかの連日投稿！」
さやか「しかも今日だけで書いた５時間クオリティー！」←マジです
まどか「前回はマミさんがかっこよく魔女を倒したけど、女の人に悲鳴が聞こえてきたんだよ！」
マミ「そしたら、以前私が対峙したあの怪人と似たようなのが現れて、暁美さんがピンチに！」
ほむら「そして、今回ついに……！」

第１０話

今回は時間を少し巻き戻そう。

暁美ほむらは廃屋ビルの前にいた。ほむらはマミ達を尾行していたのだが、巧に尾行を悟られ、大きく距離をとったのが裏目にでてしまい、ほむらはマミ達を見失ってしまったのだ。ほむらがビルの前にたどり着いた頃にはマミは既に魔女と戦闘中であった。無論、ほむらはこのことを知らない。ほむらがビルの中に入ろうとしたその時だった。黒いニット棒をかぶった謎の男がやってきたのは。

「危ないぜお譲ちゃん。こういう所は危ないからよ」

無論、ほむらはそれを聞き入れはしない。

「お気遣いどうも。でも、行かなければならないので」

ほむらは男から離れようとするが、男が回り込み行く手を阻んだ。

「おっと。行かせねぇぜ？　こういうとこはな、出るんだよ」

「何が出ると言うの？」

ほむらは男をうっとうしく思い始めた。どうせ出るなど幽霊の類だろう。魔法少女として魔女を戦っているほむらに、その程度の脅しは通用しない。ただ、「出る」という意味がそういうものであったらの話だ。

「おっかな～い怪物さ。この……俺のようになああぁぁあぁっ！」

そう叫んだ瞬間、男の瞳が灰色に変化し、顔にチーターのような顔が浮かんだ。ほむらは後ろに跳び、男を距離をとる。そして男の姿は一変、灰色の怪人へと変化した。チーターの特質を持つ、『チーターオルフェノク』だ。

「な、なんなの……？　アレは……魔女じゃない！？」

ほむらはオルフェノクと出くわしたこと以上に、ショックを受けていた。

（見たことがない……あの男と同じ、イレギュラー！？）
「魔女？　知らねぇなぁそんなの。俺は『オルフェノク』！　神に選ばれし者、だッ！」
　チーターオルフェノクが地面を蹴ると、すさまじい速さでほむらに向かってきた。ほむらはギリギリでかわし、魔法少女に変身する。
「おほぉ？　なんだそりゃ？」
　余裕そうにほむらを見るチーターオルフェノク。ほむらは左腕に装着している盾から、何処から取り出したのか拳銃を出した。チーターオルフェノクは手品みてぇだと拍手している。ほむらは拳銃を構えると、間髪いれずに銃を撃つ。そして、ありえない速さで銃弾を撃ち切り、ほむらは銃を捨てる。だが、チーターオルフェノクは全くダメージを受けていなかった。
「嘘……そんな……！？」
「はっ！　この体に、そんな玩具は効かねぇよっ！」
　チーターオルフェノクの両手に、鋭い手甲鈎（てこうかぎ）が装備される。そして、その爪をほむらに向かって振り落とした。ほむらはギリギリで避けるが、その地面は大きくえぐられ、爪あとを残す。
（……何か気に入らないわね）
　ほむらは眉間にしわを寄せてそう思った。そして再び盾から拳銃を取り出し、チーターオルフェノクを撃とうとした時だった。
「う……ん……？　……きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
　マミがここに来たときに助けられた、あの女性が起き上がったのだ。今まで隠れてて見えなかったが、起き上がったことによってその存在を知られてしまったのだ。チーターオルフェノクを見た女性は、悲鳴をあげる。
「逃げなさいッ！」
　ほむらは叫ぶが、女性は動かない。いや、恐怖によって動けなくなっていた。
「ひゃはははは！　上玉の女だぁ！　逃がすかよ！」

ほむらは銃で威嚇するが効果はない。チーターオルフェノクは走って女性の元へ行こうとするが、突如視界にほむらが現れる。確かに、チーターオルフェノクは止まった。だが、進行を邪魔されたチーターオルフェノクが黙ることはなかった。
「邪魔だあぁッ！！」

そして、爪がほむらを引き裂いた――

「あッ……がはぁっ！」
ほむらは吹き飛び、吐血する。焼けたように痛む腹部、飛び散る血。ほむらは地面に叩きつけられ転がる。
「いや……いやあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
女性が泣き叫ぶ。
「ガッ……あぁッ！」
ほむらは左腕で腹部を抑えて立ち上がろうとするが、激痛でうまく体が動かせない。チーターオルフェノクが不敵に笑う。女性はすぐに殺せると判断したのか、標的をほむらに変えていた。
（私は、こんな所で死ぬわけには……ッ！　あの娘との……『約束』がっ……！）

「オルフェノク！」

その場にいた全員がその声のする元を見る。そこには……。

乾巧……そして、マミ達がいた。

第１０話【紅き希望～ＦＡＩＺ～】

巧は女性に駆け寄った。
「これって夢ですよね……？　夢なんですよねぇ！？」

女性は泣きながら巧の衣服をつかむ。精神が不安定な状態だった。
「ああ、だから……」
――ごめんな。
巧は女性の首の後ろに手刀を打つと、女性は気絶してしまった。
「ちょ……巧！？　なにしてんのさ！」
さやかとまどかも女性に駆け寄る。
「悪い夢で終わらせてやりたいだろ……？」
そういう巧の表情は、とても悲しげであった。それを見て、二人は黙り込んでしまう。そんな中、キュゥべえは目の前にいる灰色の怪人を見つめていた。
（アレは魔女でも使い魔でもない全くの別物、マミの反応からして、以前マミが遭遇したというのと同じ存在（もの）だろう。乾巧は『オルフェノク』と呼んでいたが、一体……）

一方、マミは再び変身し、ほむらの元に駆け寄っていた。
「暁美さんっ！」
「問題……ないわッ……離れなさい！」
ほむらはマミを拒否する。が、問題ないわけがない。腹部はあの一撃でズタズタにされていたのだ。マミは無理やりほむらを寝かせようとするが、ほむらはそれを拒む。
「うじゃうじゃと沸いてきやがって……そんなに死にたいのかぁ？　あぁん？」
チーターオルフェノクは両手の手甲鈎の爪をすり合わせながら辺りを見渡す。そして、巧が立ち上がった。
「お前……いや、女を襲（にんげん）った上、ほむらを傷つけたんだ。こいつに共存の意思（そんな）はないか」
その表情から、巧の怒りが見えた。
「マミ！　ほむらの治療していてくれ！　まどかとさやかは女（そいつ）を頼

む。それと、まどかはこれ持ってろ」
そう言って、アタッシュケースを開いた。巧はそれから何かを取り出すと、空になったアタッシュケースをまどかに渡した。それは、銀色のゴツいベルト……。
「なんかカッコい……じゃない！　何今更オシャレ決め込もうとしてんだよ！」
さやかはそれをオシャレアイテムだと思ったのだろう。そんな発言をする。だが、チーターオルフェノクはそれがなんなのかを知り、驚いていた。
「それは……まさか貴様！」
巧はフッと鼻で笑いながらベルトをつける。
「あぁそうだ。俺は……」
そして懐からファイズフォンを取り出し、開いて「５５５」とコードを入れる。そして、ＥＮＴＥＲを押した。
「お前達の敵だッ！」
（悪いな、約束破って……まぁ、こういう場面だから仕方がないんだけどな……それに、俺はこいつを許せない！　命を弄ぶ、こいつだけは！）

≪Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ≫

ファイズフォンから機械音声が流れ、巧はファイズフォンを折りたたんでそれを勢いよく天に掲げた。
「変身！」
ファイズフォンをベルトに差し込み、横に倒してセットした。

≪Ｃｏｍｐｌｅｔｅ≫

再び機械音声が流れ、巧が気合をためるような構えをすると、ベルトから『フォトンストリーム』と呼ばれる赤い管が現れ、巧を赤い光で包み込んだ。すると、巧の姿はなく、そこには別の姿があった。黒のスーツ、先ほどのベルトとファイズフォン、シルバーの胸当て、『Φ』を模した大きな二つの黄色い瞳のマスク。そして、赤いフォトンストリーム。

「な……なんだぁ！？」

さやかには、巧がどうなってたのか分からなかった。

「これは……！」

当然、マミにも何が起こっているのかわからなかった。だが、ほむらはどこか心当たりがあった。以前見た、あの夢だ。

「紅い……閃光！」

そして、チーターオルフェノクは後ずさりながら、叫ぶ。

「貴様が……『ファイズ』だったのかぁぁッ！！」

「ファイズ……？」

ほむらはその名を呟く。そう……あれこそが紅き閃光（ひかり）の戦士、『仮面ライダーファイズ』なのだ。

「容赦しねぇぞ」

ファイズは右手をスナップさせながら、チーターオルフェノクに言い放つ。

「うおおおっ！！」

チーターオルフェノクが爪を振り落としてファイズに襲い掛かる。だが、ファイズはそれをさばき思い切り腹部を蹴る。そしてひるんだチーターオルフェノクに強烈な左フック、そして右アッパーが顎にクリーンヒット。チーターオルフェノクは宙に浮く。

「やあっ！」

「ぐほぁっ！」

そして、ファイズの回し蹴りで蹴り飛ばされ、廃屋ビルの中に入り込む。

「たりぃなぁ。本気で来いよ」
右手をスナップしながら、ファイズも入る。暗くなっており、ファイズの赤い輝きが一層引き立つ。
「クソッ……なめるなぁぁぁ！！」
挑発を受け、チーターオルフェノクは猛スピードでファイズに向かうが、あっさりと見切られてしまい右拳の腹パンをもろに食らった。
「がぁ！」
「フン！　ハァッ！　ラァッ！」
そのまま腹パンの連打、チーターオルフェノクはうつぶせる。ファイズはチーターオルフェノクの首を後ろを右手でつかみ、今度は右足の膝蹴りを腹部にたたきつける。ぐぇっと声を上げるチーターオルフェノクに、まどか達はわずかながらチーターオルフェノクを哀れに思った。特にさやかはファイズを正義の味方のように思っていたため、この惨たらしい戦い方（ラフファイト）を見て、若干引いていた。
「ハァ！」
そして、うつぶせるチーターオルフェノクを蹴り上げてダウンさせる。だが、チーターオルフェノクもただでやられるわけにはいかない。ファイズのスタンピングキックを回避すると、起き上がりファイズを爪で攻撃する。胸当てに火花が散り、ファイズは後ずさった。
「ぐあっ！　くっ……！」
「「巧（さん）っ！」」
まどかとさやかが叫ぶ。
「人間の味方をする愚か者風情が……俺に触れんじゃねぇよ！」
チーターオルフェノクはそのまま爪での連撃、完全に攻守が入れ替わっていた。
「ぐあぁっ！」
ファイズははじき飛ばされ、外へと飛び出した。ほむらはファイズの援護に向かおうとする。結果的に助けられた、借りを返す為。

だが、マミに止められる。
「邪魔しないで！」
「私は乾さんに頼まれたの！　暁美さんを頼むって！」
そう言ってほむらを押さえつけ治癒魔法をかける。だがほむらの思いが通じたのか、ファイズの動きが変わる。
「死ねぇ！」
「……はっ！」
チーターオルフェノクの一撃がファイズに襲い掛かるが、腕で防がれてしまった。
「何っ！？」
「らぁっ！」
ファイズの蹴り飛ばされ、チーターオルフェノクは地面に叩きつけながら転がっていった。ファイズはこの隙にファイズフォンからミッションメモリーを取り出し、右腰に取り付けられたアイテム、デジタルトーチライト型ポインティングマーカーデバイス『ファイズポインター』にセットした。

≪Ｒｅａｄｙ≫

ファイズポインターが伸び、しゃがんでそれを右足に取り付けた。
「何をする気なの……！？」
戦いを傍観する形になっていたほむらは呟く。ファイズはファイズフォンをベルトに取り付けた状態のままで開き、ＥＮＴＥＲを押した。

≪Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ≫

フォトンストリームに流れている『フォトンブラッド』が右足に集中する。ファイズはだらけるようにしゃがみこんだ。
「う……ぐッ」

チーターオルフェノクはようやく立ち上がるが、既に遅かった。ファイズは少し助走をつけて高く跳び上がり空中で一回転。そして、両足をチーターオルフェノクに向けるとファイズポインターから赤いレーザーが放たれ、チーターオルフェノクの目の前で止まり赤い円錐状に変化した。ファイズの必殺技のひとつ、『クリムゾンスマッシュ』だ。ロックオンされたチーターオルフェノクは拘束効果で動けなくなり、無防備の状態で立ち尽くす。

「「いっけえええ！！」」

まどかとさやかが叫んだ。

「やあああああ！！」

ファイズがとび蹴りの体勢をとると、円錐に吸い込まれるようにチーターオルフェノクに向かっていった。そしてファイズのドリルのような一撃が、チーターオルフェノクを貫いた。

「うぐおぉぉ……ガバァッ！！」

チーターオルフェノクの背後からファイズが現れ着地、そしてチーターオルフェノクに浮かび上がった赤い『〇』を切り裂くように『／』が現れ、チーターオルフェノクは青い炎を上げて爆発、赤い『Φ』の文字を浮かばせて灰となった。

「やったぁぁぁ！！　巧の勝ちだぁぁ！」

さやかは両腕を上げて喜ぶ。まどかは胸をなでおろし、マミはちょうどほむらの回復を終えた。ほむらは傷が癒えると立ち上がり、そのまま去ろうとしていた。

「ほむらちゃん……待ってよ！？」

まどかは引きとめようとする。

「私は、あなた達と触れ合うつもりはないわ」

「暁美さん、あれほどの傷を負ったのよ！？　ソウルジェムだって濁って……」

「そのグリーフシードはあなたが獲物よ。受け取る気は無いわ」
そう言ってほむらは立ち去ろうとする。
「待てよ」
ほむらを呼び止めたのは、変身を解いた巧だった。
「……何かしら？」
「受け取れ」
そう言って、巧はほむらにある物を投げ渡した。
「これは……グリーフシード？」
それは今日マミが取った物とは別の物であった。
「それは前に俺が倒した魔女が持ってたやつだ。俺には必要のないもんだし、マミの物でもない。それなら受け取れるだろ？」
巧はまっすぐに、ほむらを見つめていた。そして……
「……ありがとう、受け取るわ」
ほむらは静かに、そう告げる。
「……あなた、一体何者なの？」
「元アルバイトさ。クリーニング屋のな」
「……それ、ただのフリーターじゃんか」
さやかに突っ込まれ、こける巧。ほむらは馬鹿馬鹿しく思ったのか、くすりと笑う。
「あなた、名前は？」
「乾巧だ。お前は？」
「……暁美ほむらよ。乾巧……覚えておくわ。」
（また会いましょう……イレギュラー）
暁美ほむらは立ち去った。もう止める者は、誰もいなかった。

～～～～～

「う……うう～ん……あれ？　私……」
女性が起きた。
「大丈夫ですか？」

マミが寄り添う。
「あ……女の子！　あの……女の子はっ！？　それに……私っ！」
「大丈夫、大丈夫ですよ。ちょっと、悪い夢を見ていただけなんですから……」
女の子とは、そらくほむらのことだろう。マミは女性を慰めていた。
「しっかし、まさか巧があんなに強かったとはね～」
さやかが巧を見ながら言ってきた。
「それにしても……あの『オルフェノク』って言うのと、『ファイズ』って……一体なんなんですか？」
まどかが聞いてくる。
「……それは、また今度な。今日はもう休め」
「「……はい」」
色々あって疲れていた二人は、今日のところは何も聞かず、女性を帰した後は解散となった……。こうして色々あったものの、魔法少女体験コース一日目は無事に終わったのであった……。

――『ファイズ』、『オルフェノク』。どれも聞いた事も見た事もないものばかりだ。一体、何がどうなってるのかな……？　わけがわからないよ……。

To Be Continued.

第１０話（後書き）

キュゥべえ「最近僕の出番が少なくないかい？」
作者「多分皆こう言っている。『ＱＢざまぁｗｗｗ』」
キュゥべえ「わけがわからないよ」
巧「今回はついに念願の『クリムゾンスマッシュ』炸裂だ！」
まどか「かっこよかったねさやかちゃん！」
さやか「ただ、文章がどれだけいいかはなぁ……」
作者「そこは気にするな！」
全員「「「しろよ」」」
作者「ちなみに作中に仮面ライダーファイズってでたけど、あくまで文章上の表記で本編に仮面ライダーの単語はでないからね！」
ほむら「で、次回は？　マミるのかしら？」
作者「いや、まだマミらせる予定はないよ」
マミ「私死ぬ前提！？」
作者「違う違う。シャルロッテ戦までってこと！」
杏子「早く出番ほしい」
さやか「もうちょっと待ちなさいよ」
マミ（ところで、暁美さんの気に食わないって、おりマギネタ……？）
作者「じゃあ、今回登場したオルフェノクの紹介！」

チーターオルフェノク：チーターの特質をもつ。男が変化するが、名前は不明。素早い攻撃が得意で、特に手甲鈎は一撃で惨殺できるほど鋭利。

巧「ちなみに、当初はあの女性がオルフェノクという設定だったらしいぞ」
全員「「「嘘！？」」」

作者「そーそー。だけど過激派のオルフェノクが口づけ食らうとは思えないな～と思って没にしました」
さやか「あ！」
マミ「どうしたの？」
さやか「ライオン、トラ（タイガー）、そして今回のチーター……オルフェノクでラトラーターが出来た！」
まどか「あ、ほんとだ！」
作者「最初はカメとかにしようと思ったけど、あれこれあってこの際チーターでいっかってなりました」
ほむら「それで、今言いたいことがあるのだけれど」
全員「「「？」」」
ほむら「私、今オルフェノクに対して一番の無力ってこと……！ｏｒｚ」
全員「「「……ドンマイ」」」
マミ「さて、次回は第１１話【ファイズとマミと初共闘】！」
巧「ついにサブタイトルまでオーズ風に！？」
作者「それはなんとなくそなっただけ。狙ってないよ～。じゃあ、また次回お会いしましょう！」

第１１話（前書き）

作者「最近ちょっと忙しいので更新速度落ちるかもしれません」
巧「しかし、話が進むごとにここ短くなるなぁ」
まどか「シリアスになっていくのにあわせてるのかな……？」
さやか「じゃ、第１１話いってみよう！」

第１１話

それで、結局変身しちゃったわけですか～』
次の日の朝。巧はスマートレディと連絡をとっていた。
「悪いな、約束破っちまって……」
『いえ、オルフェノクがいたのでは仕方が無いですし。ただ、気をつけてくださいね。下手をすれば、乾さんまで狙われてしまいますよ～？　それで今後は？』
「オルフェノクの説明、することになっててな……どれくらいにしといたらいいんだ？」
巧はマミ達に説明する約束をしていた。オルフェノクのことをどこまで教えるべきか、スマートレディに聞く巧であった。

第１１話【ファイズとマミと初共闘】

魔法少女体験コース２日目……学校は既に終わり、一行はマミの家に居た。ちなみに、魔法で回復したとはいえ、あれほどの傷を負ったはずのほむらは何事も無かったかのように学校に来ていたらしい。流石に途中からは保健室で休んでいたりしたそうだが。
「とりあえず、昨日できなかった説明をするわね」
そう言って、マミはソウルジェムを取り出した。
「ほら……前見たときより、ちょっと濁ってるでしょ？」
「あ……確かに輝きが鈍いっていうか……」
さやかの言うとおり、確かにソウルジェムの輝きが弱かった。
「この状態が続くと、魔力が弱まっていずれ魔法が使えなくなってしまうの。でも、このグリーフシードを使えば……」
グリーフシードをソウルジェムに近づける。するとソウルジェムから穢れが浮きで、グリーフシードに吸収された。
「す、吸い取った！？」

さやかが驚く。穢れの無くなったソウルジェムは強く光り輝いた。
「なるほど、力の維持のためにグリーフシードを集めるのか」
「そういうことさ」
キュゥべえが答える。巧は魔法少女がこれを取り合う理由を再確認した。
「で、今度は巧の番だよね？」
さやかが巧を見ながら言う。キュゥべえもそうだねと言う。
「その前に確認させときたいことがある。マミ、昨日はオルフェノクに心当たりがあるみたいだったけど、前にも見たのか？」
「はい、五日前に蚊のような怪人に。その時は倒しましたけど」
（倒した……だと……いや関係ない。五日前ってことは、俺が初めて魔女と出くわしたのと一緒……これは偶然か？）
巧には、それがただの偶然には思えてならなかった。とりあえず、このことは後でスマートレディに報告しよう、そう思う巧なのだった。

「……！　ソウルジェムが！」
マミが見ると、ソウルジェムに反応があった。輝きはさほど強くなかったが、周辺に魔女がいる証拠であった。
「家の中でも反応してるってことは、ここからだいぶ近くか！」
巧がアタッシュケースを持ち、勢いよく立ち上がる。
「巧の説明受けてないけど……まいっか！」
「マミさん」
「ええ、行くわよ！」
マミ達は家を出、魔女を追って走り出した。

〜〜〜〜〜

「……見つけたぜ」
魔女を追う道中、人気のない場所で謎の男が行く手を阻んだ。変

質者のような感じだ。まどかは不安げな表情でマミの背に隠れる。
「狙いはファイズギアか……？」
巧はアタッシュケースを開き、ベルトを取り出す。
「まぁな……後は貴様の抹殺……ついでにそこのガキ共も殺ろうかなぁ！」
すると男の姿が一変、灰色の蟻のような怪人、『アントオルフェノク』となった。
「え……！？　人間が……オルフェノクに！？」
「どうなってるの……？」
さやかとマミは驚きを隠せない。キュゥべえは考え込むように、まどかは青白い顔で口を押さえ黙り込んでいた。もっとも、彼女達は『知らない』のだから仕方が無いのだが。
「……あれがオルフェノクだ……死んだ人間が生き返って誕生する怪人……」
「「「！」」」
そう、オルフェノクは死んだ人間が極稀に生き返って誕生する存在なのだ。普段は人間と同じ姿だが、怪人としての姿になることも出来る。大抵は、その力におぼれ、人間を襲うようになる。目の前のオルフェノクのように……。マミ達は人間からオルフェノクとなる過程を見ていない為、それを知らなかったのだ。
「それって……『人殺し』ってことじゃんか！」
さやかが叫ぶ。マミは顔色を失っていく。マミもまた、オルフェノクを倒してたのだから。そんな空気の中、巧はベルトを装着、ファイズフォンを開き変身コードを打つ。
「ちょっと……巧！？」
さやかが巧を止めようとする。
「さやか、こいつらは人間を襲うんだ。倒さないと駄目だ」
「でも……それって『人殺し』と同じなんだよ！？」
さやかは昨日、オルフェノクが倒されたとき喜んだことを後悔した。まどかやマミも同じ思いだった。

「確かにそうかもしれないな……けどな。これが、俺の選んだ道なんだ」
そう言って、巧はＥＮＴＥＲを押す。
≪Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ≫
「夢を守る為なら……俺は戦う！　どんな罪も背負ってやる！　変身！」
巧はファイズフォンを天に掲げ、ベルトにセットする。
≪Ｃｏｍｐｌｅｔｅ≫
「お前ら下がってろ！！」
巧はファイズに変身、手首をスナップさせアントオルフェノクに向かって駆け出した。
（魔法少女になるなら、そういった罪を背負う覚悟がないと駄目だってことだろ）
三人は巧の言っていたあの言葉を思い出す。まどかとさやかは、その言葉の意味を理解した。
「……二人とも、離れた場所に隠れてなさい」
「マミさん！？」
「美樹さん、あなたが『人殺し』というのなら、私もそうよ」
「あっ」とさやかは声を上げる。さやかは思い出した。マミがオルフェノクを倒していることに。
「戦いっていうのは食うか食われるか、いわば弱肉強食なの。強いものは弱いものを殺す。でも、巧さんはその弱いものを守る為に戦っているの。強いものを敵に回して」
マミはファイズの戦いを見る。一人で戦うその背に、不思議と孤

独を感じない。覚悟を決めたその背中。マミはその背を見て、憧れを感じた。
（私も……乾さんみたいになりたい！）
そしてマミは魔法少女に変身、ファイズに向かって走り出した。
「だから……私も戦うわ！」

〜〜〜〜〜

「うおあああ！」
「！　やば……」
アントオルフェノクの武器の剣がファイズに降りかかる。だが。
「させないわ！」
銃声が飛び、アントオルフェノクの剣がはじかれた。マミの放った銃弾が剣に命中したのだ。
「マミ！」
巧が何で来たと言わんばかりの反応を見せる。
「乾さん、私も……戦わせてください！」
「お前……！」
マミは真剣な表情でファイズ……否、巧を見る。その眼差しには強い意志がこめられていた。
「……お願いします」
追い返そうとしていた巧だったが、その眼を見てそれが出来なかった。
「……分かった。いくぜマミ！」
「はい！」
巧……ファイズは右手をスナップさせ、マミは新たに召喚したマスケット銃を構える。
「うおおおお！」
アントオルフェノクは剣を構えなおし、二人に向かって走る。

「はっ！」
マミはアントオルフェノクの足元を撃つ。ダメージはなくとも有効な手段であった。アントオルフェノクはバランスを崩し、よろけて隙を作ってしまう。ファイズはそれを見逃さない。すぐさま殴打の連続。
「はぁっ！」
「グホッ！」
ファイズの蹴りが腹部に入り、アントは腹を抱える。そしてファイズはアントオルフェノクの頭をつかみ殴り飛ばした。ふらふらになりながらもアントオルフェノクは立ち上がり、マミに襲い掛かる。
「死ねぇぇぇ！！」
アントオルフェノクは剣を振り落とすが、リボンでそれをガードする。そして、そのままリボンが剣を奪い取った。
「何……はッ！？」
驚くアントオルフェノクだったが、腹部に違和感を感じてそこを見る。すると、マスケット銃二丁の銃口が触れていた。
「流石にゼロ距離ならダメージはあるわよね？」
マミはマスケット銃を同時に発射。これは効いたようで、アントオルフェノクを声を上げてよろよろと後ろに後退する。そのまま、胸元のリボンを伸ばしアントオルフェノクを縛り付けた。
「乾さん、今です！」
「まかせろっ！」
ファイズはミッションメモリーを取り外しでファイズショットに取り付ける。

≪Ｒｅａｄｙ≫

ファイズはファイズショットを装着、ファイズフォンを開きＥＮＴＥＲを押す。

≪Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ≫

フォトンブラッドがフォトンストリームを駆け巡り、右手に集中する。

「行きますよ！」

「こい！」

縛り付けたアントオルフェノクをファイズに向かって放り投げる。

「うわあぁぁあぁぁあああッ！！」

そして、叫びながらこちらに向かってくるアントオルフェノクを、ファイズが『グランインパクト』で迎撃した。

「やあああああ！」

アントオルフェノクはファイズショットで思い切り殴り飛ばされ、青い炎を吹き上げて爆発、灰と化した――

「巧！　マミさん！　大丈夫！？」

さやかが駆け寄ってくる。

「今度は喜ばないんだな」

ファイズは皮肉そうに言う。

「まぁそりゃ……元人間って言われると、正直……」

「それよりもマミさん……魔女の方は……！？」

周りが突然、歪みだした。

「どうやら、魔女（そっち）から来てくれたみたいね。乾さん。これからも、一緒に戦ってくれませんか？」

マミの共闘の誘いだ。ファイズはそれを鼻で笑う。

「いまさら何言ってんだ。俺達はもう、共に戦う戦友（なかま）だろ……」

「……はい！」

マミが笑みを浮かべた。

「きゃきゃ！」

鎌のような使い魔がこちらに向かってくる。ここはもう魔女の結界、油断を許されない戦場。
「鹿目さん、美樹さん、気をつけて！」
マミは魔法でパワーアップしたバットをさやかに渡し、マスケット銃を構える。ファイズが使い魔に向かって駆け出し、マミ達もまた走り出した。
（乾さんと一緒に戦えば、もっと強くなれるかもしれない……そして、なれるかもしれない。何も恐れない、『正義の味方』に！）
ファイズとマミの共闘、マミの巧への憧れ、これが運命にどんな影響を与えるのか……それは、まだ先の話である……。

～～～～～

なるほどね……それがオルフェノク、興味深いね……そして、ファイズ。魔法なしに魔女に対抗できうる存在。……場合によっては……ね。

～～～～～

同時刻ほむらの家。
「オルフェノク……ファイズ……どれも今までの『時間軸』にない存在。一体、何がどうなっているというの……？」
ほむらは焦りを感じていた。まだ痛む腹部をさすり、考え込む。
「こちらの武器は効かない……こんなことで守れるの……？　『約束』を、あの娘を……」

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第１１話（後書き）

巧「次回は今回の続き、ファイズとマミの共闘魔女編だ！」
マミ「第１２話サブタイトル未定！」
キュゥべえ「今回僕の出番が少ないじゃないか。しかも次回は出番すらないなんて……」
作者「読者は言っている。『ＱＢざまぁｗ』ってな！」
杏子「アンタもこっちにこいよ……光はまぶしすぎる」
さやか「杏子が地獄の住人にぃぃぃ！？　構ってあげるから帰ってきてぇぇぇ！！」

第１２話（前書き）

作者「５００００アクセス突破！　皆さんありがとうございます！！」
まどか「時間がかかってごめんね！」
マミ「前回は乾さんと協力してオルフェノクを撃破！」
さやか「かませだったうえに説明されなかったアントはマジ不憫」
巧「じゃあ行くぜ！」

第12話

武家屋敷のような空間……今回の魔女の結界だ。鎌や分銅のような使い魔が飛んでくる。巧の変身するファイズは、ファイズフォンを一度に光弾を3発撃てる拳銃モード『Ｂｕｒｓｔ　ｍｏｄｅ』にする。さらにファイズポインターをファイズフォンにセットし、遠距離射撃を可能にした。

「巧今回はかなりやる気なんじゃない？」

現在いまだにバットを使っていないさやかがバットを振り回しながら言う。

「相手が刃物と分銅だからな……まぁ、使い魔自体危険だけどな！」

ファイズとマミは使い魔を打ち抜きながら前へと進んでいくのだった。

～～～～～

「さて……どうすればいいのかしら」

場所は変わってほむらの家。ほむらはオルフェノクに対抗すべく策を練っていた。ほむらの武器は効かない。自身の魔法を使っても勝てるかすら怪しいのだ。

「ファイズ……あのベルトさえあれば……」

ほむらはあのオルフェノクをたやすく葬ったファイズを思い出す。あのベルトさへ手に入れば、そうほむらは考える。が、ファイズは未知の存在。自分に使えるのか、使えたとしても、『あの存在』を倒せるのか。結局のところ、一番の策はファイズである乾巧と手を組むことだった。ほむらは巧にもらったグリーフシードを手に取りじっと見つめる。

「……私は誰にも頼らないと誓った。けど……乾巧、少しは信頼するに値するかもしれないわね……」

第１２話【二人の戦士、一人の思い】

「マミさん……巧さん……」

まどかはさやかの背に隠れながらファイズとマミを見ていた。さやかは使い魔が近づいてこないので、退屈そうにあくびをしており、あまり戦いを見ている様子ではない。だが、まどかは二人の戦いから目をそらすことなくじっと見続けていた。正直、戦いは怖い。が、まどかの脳裏には、ある思いが生まれつつあった。

（もし……もしも……）

その瞬間、結界が大きく変動していく。

「魔女……いえ、なりかけの使い魔ね」

「なりかけってことは……既に襲われた人が……！？」

さやかは歯を食いしばり地団駄を踏む。被害が出てしまっていることに悔しさを感じているのだろう。無論マミも悔しい思いをしていないわけではない。だが、今は目の前に現れようとする強敵を迎え撃つ為に余計なことは考えないようにしているのだ。ようは、気持ちの切り替えだ。

「美樹さん、気持ちはわかるけど今は目の前のことに集中しなさい。足元をすくわれるよ？」

「……はい」

マミはそう言いながら新たに召喚したマスケット銃を構える。さやかもバットを構えなおし、ファイズもいつでも迎え撃てるように身構える。そして、魔女もどきが現れた。

案山子のような外見。鎖鎌を持っている。あたりは鎖だらけ。まるで蜘蛛の糸ように絡まり、雪の結晶のようになっている。

『鎖の魔女』、その性質は「束縛」。ただし、あくまで親の話。今マミの目の前にいるのは親の姿をまだ真似ている不完全な状態。成長途中の使い魔だ。おそらく、後一人人間を食らえば魔女となり

グリーフシードをはらむだろう。
「マミ、いいのか？　もう少し待てば魔女になるぜ？」
「なっ……巧何言ってんのさ！？」
ファイズがいやらしそうにマミに聞く。魔法少女にとってグリーフシードは必須。特に今の状態なら、攻撃せずに時間が経つまで待つのが普通だろう。
「……乾さん、私の答えは分かってるはずですよね？」
マミは鼻で笑い答える。魔女になりかけだろうが関係ない。人間の脅威になるなら、倒すだけ。マミは自分の利益より人の命を優先させる魔法少女なのだ。それは、巧とはまた別の形で人を守る戦士の意思。
「……そうだな。行くぜマミ」
「はいっ！」
マミがまどか達に結界を張ると、鎖がマミ達を捕まえようと急速に向かってくる。ファイズはためしにファイズフォンで撃ってみるが、全く効き目がない。ファイズは舌打ちし、マミはリボンを伸ばし鎖に対抗する。鎖の進行を止めようとするが、弾かれてしまう。マミとファイズは鎖を跳んで回避、マスケット銃とファイズフォンで魔女もどきを狙い打つ。が、鎖でガードされる。
「堅(かった)いなぁ……」
「ここは、大技で行きましょう！」
「「「うえええええ！！？」」」
そう言って、マミの両腕には大型のバズーカが装着される。三人は流石に驚いた。
「そんなのありか！？」
ファイズが思わずつっこむ。マミはそれを無視して発射。魔女もどきに命中すると魔女もどきは叫び声を上げて退く。流石に防ぎきれなかったようだ。ファイズはひるんでいる魔女もどきにショットを次々と打ち込んでいく。
「ギャアアアア！！」

「よし……効いてるな！」
ファイズは手ごたえを感じる。が、魔女もどきもただでは終わらない。鎖がファイズを拘束したのだ。
「あっ……巧さん！」
まどかが思わず叫ぶ。
「しまっ……うおああ！！？」
ファイズはそのまま振り回され、壁に向かって投げ飛ばされる。が、ファイズは自力で鎖を破る。
「こんなので……縛ったつもりか！」
ファイズフォンをベルトに戻し、取り外したミッションメモリーをファイズポインターに取り付ける。ファイズは壁に足をつけ、右足にファイズポインターを取り付けて、ファイズフォンのＥＮＴＥＲを押した。

≪Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ≫

「はっ！」
ファイズは壁を蹴り、魔女もどきに向かって高く跳んだ。魔女もどきに向かってポインターから赤いレーザーを打ち出し、魔女もどきを拘束する。『クリムゾンスマッシュ』だ。ファイズはそのまま蹴りの体勢に入る……が。
「おぶっ！！？」
「あっ……！！」
「「マミさあああああああんッ！！？」」

なんと、マミも『ティロ・フィナーレ』を撃つためにリボンをトランポリンにして高く飛び上がっていたのだった。そこで、ファイズの顔面を踏んづけてしまったのだ。まさかの連携失敗にまどかとさやかは同時につっこんでしまう。

「……あっ！」
マミは既に『ティロ・フィナーレ』の発砲準備をし終わり、発砲まで後少しだった。マミは急いで標準を魔女もどきに戻そうとするが、光弾は発射されてしまった。そしてそれは偶然、取り残された赤い円錐に命中。すると、『クリムゾンスマッシュ』が発動した時のように、円錐が使い魔目掛けて動き出した。
そしてそれは魔女もどきに命中しドリルのように魔女もどきをえぐっていき、とどめの光弾が魔女もどきを飲み込んで大爆発を起こした。マミは地に舞い降り、紅茶をすすってつぶやいた。
「……『ロッソ・ティロ・フィナーレ』」
「……後で言うんですね」

〜〜〜〜〜

「マぁぁぁミぃぃぃぃぃぃっ！」
「ご……ごめんなさい」
「「こ……怖い」」
魔女もどきとの戦闘を終え、先ほど蹴落とされた巧は泣く子も黙るというより、鬼すら泣いてしまいそうなぐらいな勢いで切れていた。巧から感じる怒りのオーラにマミどころか、まどかとさやかまでもが脅えていた。
「何がロッソだぁ……？　「ごめん」の一言もないのかぁ？」
「す、すいません」
「お前……顔蹴られた時見えたんだぞ？」
「……え？」
巧の一言にマミはぽかんとした表情をした。
「まどか、さやか……お前らマミのパンツがどんなんだか知りたくないか……？」
先ほどの怒りの表情はなく、巧は笑っていた。だが、それがむしろ怖い。

「えええええあ、あの巧さん！？」
「マミさんのパンツ……大人な感じ？　かわいい系？」
顔を真っ赤にしながら困惑するマミ、変なところに食いつくさやか。
「これは罰だマミ……お前は恥じらいを覚えろ……！　いくぞマミのパンツはなぁ」
「ふんふん」
「やめてえええええ！！」
「やめようよ皆……」
もはやマミの反応を楽しんでいる巧、パンツに興味津々のさやか、顔を真っ赤にして泣きながら止めに入るマミ。それを見て、まどかは苦笑いしていた。

――私、正直戦うのは怖いよ。戦いは命の危険があるし、いつかオルフェノクと対峙するかもしれない。その時私は、戦えるのか、倒せるのか……怖すぎて自分にもわからないよ。
……でも、巧さんは自分から罪を背負って誰かのために戦っている。マミさんも人助けのために、自分が傷つきながらがんばってる。そんな二人の姿はとっても素敵で、かっこよくって……もし、もしも私にも誰かの為に役に立てる、駄目な自分でも何かできるんだって思うと……それは、とってもうれしいなって……

「……思っちゃったり」
まどかはくすりと笑って、騒ぐ三人を見る。すると、マミは魔法少女に変身しており、マスケット銃を巧とさやかに向けていた。
「……もう駄目……皆死ぬしかないじゃない！」
「落ち着けマミ！　言わねぇから！　言わねぇからそれ下ろせ！」
「ていうかなんでそこまで過剰反応するんです！？　もしかしてかなり恥ずかし……いやいや何にも言ってませんから早く下ろしてくださあああああい！！」

「……早く止めないとなぁ」
そう言って、まどかはマミに駆け寄っていくのだった。
――戦うことはできないかもしれない……けど、守ることだったらできるかもしれない。そうなれば、いつか私も……マミさんや、巧さんみたいになれるかな？
「いいえ駄目よ」
遠くから誰かがつぶやく。無論、それは暁美ほむらだ。
「鹿目まどか……あなたはあなたのままでいい、変わる価値はない。……やはり乾巧、あなたは私の障害（てき）なの？　それとも……」
ほむらの握るあの時のグリーフシード。そして、ほむらは誰にも気づかれぬまま、その場をしずかに立ち去ったのだった……
To Be Continued.

第12話（後書き）

巧「明るめに戻ったな」
作者「平和な内は明るくしたくて……」
マミ「解説ね」

アントオルフェノク：蟻の特質を持つ。剣が武器。ぶっちゃけかませw

ロッソ・ティロ・フィナーレ：ティロフィナーレをあの円錐に撃ち込んで発動する。でも使うほどのもんじゃない。

鎖の魔女：性質は「束縛」。気に入ったものは全て自分のものにしようとする。魔女自体は未登場。使い魔が鎌や分銅なのは鎖つながり

さやか「鎖だけに？」
マミ「前回書き忘れたアントオルフェノクのことまで書いてるわね」
さやか「（スルーされた）……で、次回は？」
ほむら「未定だけれど……巴マミ……」
まどか「マミさん……」
巧「マミ……」
マミ「なにこれ！？　まさかシャルロッテ戦！！？」
さやか「……次回もよろしくー」
キュゥべえ「今回はついに出番がなかったよ……」
作者「別にいいじゃん。後からでまくりなんだから（本性が）」

第１３話（前書き）

最近更新速度が落ちてますね；　元々不定期更新前提なんですけどね……

前回のあらすじ

・合体必殺技

・マミさんマジ廚二

・まどかの決意？

まどか「それでは！　第１３話始まります！」

第13話

「はい、お疲れさん」
マミの家に居候するようになってから巧は、さやかの『フリーター』発言を受け、コンビニでバイトを始めていた。バイトなどは長続きしない巧ではあるが、マミに迷惑をかけたくないのか、バイト初日で好印象を与えていた。……まぁ、口は悪いが。
巧はバイトを終え、マミの家に帰ろうとしていた。オートバジンに乗ろうとする巧に、少女が声をかけた。
「乾巧、話がある」
それは無論、暁美ほむらだった。

「……そう、オルフェノクにはそんな秘密が」
巧はオルフェノクのことをほむらに教えた。人間がオルフェノクに変化するところを見たほむらだったが、やはりそれなりにショックを受けていた。
「……乾巧、私にはオルフェノクに対しての戦力は無いに等しい。だから……できれば手を組みたい」
「なんで俺だけなんだ？　マミだって」
「巴マミはどうでもいいの。それとできれば、巴マミを鹿目まどかや美樹さやかから切り離してほしい。巴マミは二人にとって有害な存在なの」
「……どういうことだよ」
巧は眉間にしわを寄せる。マミを有害扱いされ、巧は軽い苛立ちを覚えた。
「二人のことを考えているのなら、普通ならすぐに引き返させるべきよ。なのに巴マミは逆、二人を魔法少女に引き込もうとしている。

魔法少女と魔女との戦いは生ぬるいものじゃない、生死をかけた殺し合いなの。あなたとオルフェノクのようにね」
ほむらは淡々と自分の意見を述べる。巧は黙ってそれを聞いていた。
「……あなたはどう思っているの？」
「俺はまあ……まどか達にはあまり魔法少女にはなってほしくないな」
「……そう」
ほむらはなぜかほっと一息をつき、安心した顔つきになる。
「乾巧、ちゃんと巴マミの戦いを見ることね。おそらくあなたは幾たびの戦いに勝ち抜いてきた、だからわかるはずよ。巴マミが有害な存在である決定的な証拠が」
そう言いほむらは立ち去ろうとするが、巧は待てと言いほむらを止めた。
「……俺は確かに魔法少女になることには賛成はできない。けどだからって、マミとあいつらを切り離すことはできない。協力ならいくらでもする。けど、マミ達は絶対に離させない」
「まぁ……今はまだ、いいわ。彼女達が魔法少女にさえならなければ。ただ覚えておきなさい。巴マミはいずれ……化けの皮をはがすわ」
「おい待っ……！」
巧が再び引きとめようとするがほむらは早々を走り去ってしまった。
「なんなんだよあいつ」
巧はため息をこぼし呟いた。その時だった。ファイズフォンから着信音が流れ、巧は通話に応じた。
「巧大変なんだ！　オルフェノクが……！」
さやかから電話の呼び出し。ふと啓太郎を思い出したが、そんな

のは今は関係ない。場所を聞き出し、オートバジンで走り出したのだった。
「あーくそ！　どいつもこいつも！」

第１３話【闇夜の変身、紅き一閃】

「おおおおおお！！」
マミ達はオルフェノクから逃げていた。マミのマスケット銃では倒せない、マミは足止め程度に攻撃を仕掛け距離を離そうとするが、相手はなかなかひるまない。まどかとさやかは息切れを起こしつつも走り続けていた。逃げる先は、人通りのない安全な場所。だが、世界最長のカブトムシのようなオルフェノク、『ヘラクレスオルフェノク』が執拗に追う。
「マミさん……！」
まどかが不安そうマミに声をかける。
「安心して……私が絶対にあなた達を守る！」
「守る……？　無理だなぁ！」
ヘラクレスカブトオルフェノクは自身の武器である槍を召喚する。そして、槍はその長さを変えてまどかに襲い掛かる。
「え……！？」
「鹿目さん危ない！」
マミがリボンでギリギリのところでまどかを守り、マスケット銃を変化、ロケットランチャーのような小型のバズーカを作り出した。
「食らいなさ……！？」
バズーカを放とうとしたマミであったが、敵の槍がそれを阻んだ。槍がむちのようにしなり、叩き落としたのだ。マミは唇を噛み、新たに召喚したマスケット銃で応戦する。
「きゃあっ！」
「まどかっ！！」
だが、事態は急変する。まどかが転んでしまったのだ。さやかは

急いでまどかを立たせようとするが既に時遅し、ヘラクレスオルフェノクが追いついたのだ。マミは急いで助けようとするが、間に合わない。
「ふはははは……あきらめろ！　お前達はもぶふっ！！？」
ヘラクレスオルフェノクがまどか達に手をかけようとした瞬間、銀色のバイクに轢かれた轢き飛ばされた。
「「「バイクに轢かれたあああああ！！？」」」
あまりの事態に思わず三人は突っ込んでしまった。

「お前ら！　大丈夫か！？」
それはもちろん、乾巧であった。
「巧もっと早くに来てよ！　危なかったじゃんか！」
「そんなことよりあの人轢かれてかわいそうだよ！？」
巧の到着が遅かったことに怒るさやか、オルフェノクを心配するまどかなのであった。
「おのれ……！」
「まどかとさやかは下がってろ！」
そう叫び、巧はベルトを構える。二人は物陰に隠れる。巧はファイズフォンに変身コードを入れ、腰にベルトをつけようとする。
「させるかあああ！」
「ぐあ！？」
だが、ヘラクレスオルフェノクは槍の伸ばし、ベルトとファイズフォンを弾き飛ばしたのだ。そしてそれは、マミの足元に落ちた。
「マミ……それを早く！」
巧はベルトを受け取ろうとするが、マミはなんと、ベルトを自分の腰に巻きつけたのだ。
「いえ……私が……戦います！」
そう言って、マミはＥＮＴＥＲを押した。

≪Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ≫

「な……よぜ！　お前には使え……」
巧はマミが変身できないことを知っている。だが、マミは聞かずにファイズフォンを天高くかかげる。
「……変身ッ！」
ファイズのベルトは使う者を選ぶ。適合しない者はベルトに弾き飛ばされる。巧はマミがベルトに弾き飛ばされると思った……だが。
≪Ｃｏｍｐｌｅｔｅ≫
なんと、マミは紅い光に包まれ、ファイズに変身したのだ。赤いフォトンスリー無と眼が光り、闇がファイズの存在を一層引き立てる。
「嘘だろおおおおおお！！？」
「どうした巧！？」
驚きを隠せず大声を上げる巧にさやかが思わず突っ込んでしまった。
「よぉし、行くわよ！」
マミはファイティングポーズをとりヘラクレスオルフェノクに向かってゆく。ヘラクレスオルフェノクは槍を曲げてファイズを攻撃する。
「きゃああ！」
ファイズは弾き飛ばされ、しりもちをついた。それでもファイズは立ち上がりヘラクレスオルフェノクに殴りかかる。だがそれらは全て避けられ蹴りを食らいファイズは飛ばされる。
「くっ……不味いわね……！」
マミはファイズフォンを取り外し、昨日巧が使っていたフォンブラスターを使おうとするが……
「……どうすればいいの！？」

「だから俺に返せぇぇぇ！」
マミはファイズフォンの使い方を知らなかった。早くベルトを返せと巧が叫ぶ。
「……邪魔だ」
ヘラクレスオルフェノクもあきれながらもファイズを攻撃、ファイズは吹き飛ばされ、変身が解けマミの姿に戻る。
「痛た……まだまだ！」
変身コードは覚えていたようで、マミは変身コードを入れ再び変身しようとする。

≪Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ≫

「変身！」
だが。

≪ＥＲＲＯＲ≫

流れたのは『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』ではなく『Ｅｒｒｏｒ』。すなわち……
「きゃあ！？」
「何っ！？」
ベルトに弾き飛ばされ、ベルトはヘラクレスオルフェノクの足元に落ちる。それを見て巧は驚く。そして、ヘラクレスオルフェノクはそれを手に取った。
「ファイズのベルト……もらったぞ」
「させるかあああ！」
その瞬間、巧はさやかから盗ったバットを投げ、そのバットはヘラクレスオルフェノクの顔面に直撃する。
「ああっ！　マミカルバットが！」

「マミカルバットってなんだよ！？」
さやかの謎の発言に突っ込みながらも巧はベルトを取り返し、腰に巻きつけファイズフォンに変身コードを入れる。

≪Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ≫

「後で覚えとけよ……変身！」

≪Ｃｏｍｐｌｅｔｅ≫

巧はファイズに変身、右手をスナップさせヘラクレスオルフェノクに向かって走り出す……ことはせず、ファイズフォンを取り出して「１０６」のコードを入力。『Ｂｕｒｓｔ　ｍｏｄｅ』にしミッションメモリーを取り出す。そしてオートバジンのハンドルにセットし、振り向き際に一気に引き抜いた。

≪Ｒｅａｄｙ≫

ファイズの武器のひとつ、『ファイズエッジ』と呼ばれる剣だ。ファイズは右手に剣を、左手にフォンブラスターを持ちヘラクレスオルフェノクと対峙する。
「うおあああ！」
先に動いたのはヘラクレスオルフェノク。自在に伸び、曲がる槍でファイズに襲い掛かる。ファイズはファイズエッジで槍を防ぎつつフォンブラスターで攻撃する。だがヘラクレスオルフェノクの体は硬いようで、決定打にはならない。ファイズは舌打ちしながらファイズフォンをベルト戻し特攻を仕掛ける。槍の矛先が迫るが、ファイズは相手が反応できないギリギリのタイミングで避ける。
「やぁっ！」
ファイズの一撃がヘラクレスオルフェノクに命中する。ヘラクレ

スオルフェノクは槍を元に戻しファイズと攻防を繰り広げる。斬っては斬られ、血の代わりのように辺りに火花が飛び散る。ヘラクレスオルフェノクはファイズから距離を離そうとするが、ファイズは逃がすまいと前へ前へと乗り出していく。そんな中、ヘラクレスオルフェノクは地面に槍を突き刺した。

「なんのつもりだ？」

「くくく……こういうことだ！」

ヘラクレスオルフェノクは槍の石突に乗り、槍を伸ばした。地面に刺さった槍はヘラクレスオルフェノクの乗せたまま伸びていく。

「な……なんだと！？」

ファイズは敵の予想外の行動に同様を隠せなかった。

「ははは……食らえぃ！」

ヘラクレスオルフェノクは槍から降り、槍を元に戻しファイズに向かって急降下していく。ヘラクレスオルフェノクは槍の矛先をファイズに向け、ファイズは避けれずにまともに食らってしまった。ファイズは仰向けで倒れこむ。

「がはッ！！」

「巧さん！」

「まどか危ないって！」

まどかが叫びファイズの元へ行こうとするがさやかに止められる。

「ぐッ……はっ！」

ファイズは何とか起き上がるが、ヘラクレスオルフェノクはファイズに向かって槍を構え飛び掛る。

「死ねぇぇぇ！　ファイズゥゥゥ！！」

「巧さぁぁぁん！！」

「逃げろ巧ぃぃぃ！」

まどかは泣きながら飛び出そうとする。さやかはそれを止めながらも巧に向かって叫ぶ。

「駄目……間に合わない！」

マミはリボンを使いファイズを助けようとするが、距離が遠く間

に合いそうも無い。誰もが諦めた。が、ファイズ……巧は諦めていなかった。
「うおらぁぁ！」
ファイズは向かってくる槍をブレイクダンスの要領で腕を軸にし、回し蹴りで槍の蹴り軌道をそらしたのだ。
「なっ……しまった！」
勢いに任せていたヘラクレスオルフェノクは軌道をそらされそのまま狙いとは全く別の場所に攻撃、槍の矛先が地面をえぐる。ファイズはヘラクレスオルフェノクを蹴り飛ばし槍から放す。ファイズはそのままヘラクレスオルフェノクに特攻を仕掛ける。武器を失いながらもヘラクレスオルフェノクはファイズに立ち向かうが、ファイズエッジの連続攻撃に太刀打ちできずにいた。
「はぁ！」
ファイズの突きでヘラクレスオルフェノクは吹っ飛ばされる。ファイズはファイズフォンを開き、ＥＮＴＥＲを押す。

≪Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ≫

フォトンブラットによるエネルギーが集中し、ファイズエッジの刀身がより一層輝きを増してく。ファイズの必殺技、『スパークルカット』だ。ファイズエッジをヘラクレスオルフェノクに向かって振り上げ、赤い衝撃波が地面を走る。衝撃波はヘラクレスオルフェノクに命中、その瞬間ヘラクレスオルフェノクは赤いサークルに拘束された。ファイズは動けなくなったヘラクレスオルフェノクに向かって駆け出し、何度も斬りつける。
「やあああ！！」
そして、力を込めた一閃、ヘラクレスオルフェノクを拘束していたサークルが消え、同時にヘラクレスオルフェノクは青い炎を吹き上げ灰になった。

「……痛い」
「大丈夫……じゃ、ないですよね」
戦いが終わった後、マミは巧に拳骨をもらっていた。一応変身を解いた後で。漫画的表現で例えるとすればマミの頭にはでかいたんこぶができているだろう。まどかはマミを見て苦笑いしていた。
「しっかし、ファイズの武器って剣もあったんだねーかっこいいなぁ。あたしも魔法少女になった時には剣がいいなぁ」
さやかは羨ましそうに言う。
「お前が剣持ったら前へ前へって突進して行きそうだからなぁ」
巧の言葉にさやかがなんだよーと突っ込む。そんな話をしつつも、巧はあることをずっと考え込んでいた。

――マミはベルトを使えないはずだ、なのに変身できた。いや、それならまだいい。一度変身できたはずなのに二度目はできなかった。これはどういうことだ？
魔女や魔法少女のこともいまだ謎だらけ……これはなんか、とんでもないものが絡んでいる、そんな気がしてならない……

マミがファイズに変身したこと、変身できたはずなのに今度はできなかった。ベルトにも以上はない。今夜の不可解な出来事に頭を抱える巧であった……

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第13話（後書き）

キュゥべえ「前回に続いて今回も空気かい？　感情のない僕も流石に怒るよ？」
作者「マジすんません。ま、次回からは出まくりなんで……ええ」
巧「今回からシャルロッテ戦にはいるかと思われてたみたいだけど、次回からだからな」
作者「もしかしたら外伝とか別の話はさむかも」
ほむら「今回のまとめよ」

マミの小型バズーカ：未使用。一応「S・ティロ・フィナーレ」という技が打てる。

マミカルバット：マミの魔法で強化されたバットのこと。さやかが勝手にそう呼んでいる。

マミファイズ：あっさりやられたので詳しい戦闘能力は不明。どうして変身できたのかも不明。ちゃんとしたファイティングポーズをとる。銃が似合いそう。

ヘラクレスオルフェノク：ヘラクレスオオカブトの特質を持つ。名前が長いのでヘラクレスに縮めた。体は甲虫だけに硬い。武器は伸縮自在で曲がる槍。使い方を知らなかったとはいえマミファイズを倒し、巧ファイズもピンチに陥るなど戦闘能力は高かったが、自身の油断と巧の機転によって敗れた。

杏子「へくしっ！　あたしの出番はまだか」
巧「まだだ。もうちょい待て」
マミ「次回はついに運命の戦いが……！？」

さやか「次回５５５☆ＭＡＧＩＫＡ第１４話【願いと夢、マミの思い】！　次回も目が離せない！」
作者「外伝は【１３．５話】！　ま、やるならの話ですが」
キュゥべえ「次回の話と契約もよろしくね！」
ほむら「黙りなさい」

外伝【第１３．５話　ＰａｒｔＡ】（前書き）

まさかの外伝パート分け；
久々にキュゥべえ出ますねｗ
長さ的にもうこれナンバリングでいいよと思ったけど、前回で１４話からシャルロッテ戦っていっちゃったからなぁと；
というわけでまさに１３．５話です。ではどうぞ。

外伝【第１３．５話　ＰａｒｔＡ】

「巧！　お願いあるんだけど！」
ある休日、さやかは巧に願い事を頼んでいた。
「さやか、僕と契約すれば願いなんて簡単にきゅぷッ」
「うるさい」
キュゥべえはちゃっかりさやかに契約を進めるが巧にチョップを食らい中断されてしまった。
「あたし、まだちゃんとした願い事とか決まってないからさ、力不足だなぁって思って……筋違いだとは思うけど、あたし、強くなりたいんだ。だから……お願い巧！　あたしを鍛えて！」

外伝【第１３．５話　ＰａｒｔＡ】

「そんなこと頼むくらいなら、いっそ契約した方がいいんじゃないかな？」
「お前は黙ってろ」
契約契約と口にするキュゥべえに腹が立ち言葉が乱暴になる巧。
「あたしさ、まどかを守る立場なのにいっつもマミさんや巧に危ないとこ助けてもらってさ。自分で守れないようじゃ魔法少女になっても駄目のままだなって思って……ほんとはマミさんに相談するつもりだったんだけど、よく考えたらあの人は射撃だから参考にできないし、でも、ファイズは剣あるし肉弾戦多いから、参考にできるとこは多いだろうなって」
「なるほどな」
確かに、と巧は呟く。さやかは強がってはいるが結局はただの女子中学生、使い魔におびえてばかりだ。そのせいで使い魔を襲われかけ、マミやファイズに助けられることも少なくはなかった。
「よし、わかった」

さやかと知り合ってわかったこと。さやかが意地っ張りだということだった。おびえてても大丈夫だと嘘をつき、どこか無駄にプライド高いところがあった。そのさやかが頼みごとをする以上、巧もほうって置けなかった。そんなわけで巧は了承したのであった。

〜〜〜〜〜

「……で、なんでゲームセンター？」
「ここには色々と役立ちそうなのがあるからな。ほら、行くぞ」
そんなこんなで、巧達はゲームセンターの中に入っていった。ちなみに、ちゃっかりまどかとマミがついていたりする。

「とりあえずまどか。マミと一緒にゲームしてこい」
「え……あ、はい。マミさん、行きましょう！」
「え……ええ！」
（誰かと一緒にゲームなんて、いつぶりかしら……ああ、し・あ・わ・せ）
「あの……マミさん大丈夫ですか？」
頬を赤らめ涙を浮かべるマミなのであった。

「なんでまどかとマミさん離れさせたわけ？」
「マミはともかく、まどかにはちょっと刺激が強すぎるからな。ほら、こっちだ」
そう言って、巧はさやかを誘導していった……

「これだ」
巧が指差す方向には、あるゲームがあった。
「『アンデットバスター』……ってこれホラーじゃん！？　しかもかなりやばいやつ！」
説明しよう！　『アンデットバスター』とは、大量のゾンビを打

ち倒しながら進んでいくホラーシューティングゲームである！　これならまだ普通であるが、このゲームに出てくる敵や描写がリアル過ぎて大の大人でも泣いてしまい、ホラー好きや外国人にも「これは怖すぎる」と言わせるほどなのだ。例を挙げれば、ゾンビの頭を打ち抜けば血や脳の破片が飛び散ったり、腹を撃てば腐った腹の皮膚が崩れ去り、内臓がずるずると落ちていくなど、グロテスク描写や怪物のデザインが外国のホラーゲーム並み、それ以上なのだ。そのためこのゲーム、やる人が少ないのだ。なぜこんなのを作ったのだろうか。

「無理無理！！　なんでこんなゲームやらされんの！？　ていうかランキングのトップに『ＭＡＭＩ』ってあるけどまさかマミさん！？」

「多分違うと思うぞ」

以前マミもやろうとしたらしいが、デモを見ただけで恐怖してしまい止めたらしい。その経験から、巧にどうだろうかと進めたのだった。ちなみに、その夜マミは泣いたらしい。

「これに慣れれば使い魔や魔女も怖くなくなるだろ？」

「いやそうかもしんないけど荒治療過ぎる！　ちょ、お金入れんなぁぁぁ！」

「安心しろ、このゲーム難易度高いらしいからな、俺もペアでやってやる」

さやかに無理やり銃型のコントローラを渡し、ゲームが始まる。

『時は近代、一人のマッドサイエンティストが生み出したおぞましき怪物達によって町が支配され……』

ゲームのあらすじが流れ（ちなみに英語音声である）、さやかは息を呑む。そして、ゲームが始まった。

『グオオオオ！』

「ぎゃあああぁぁぁぁぁあああぁぁぁあッ！　怖いいいいいいいい

！！」
「……確かにこれは少し……」
巧ですら引く程のリアルさ。正直、これが小説でよかったと作者は思う。
「ぎゃあああああ！　脳みそがあああああ！　内臓がああああ！」
「わかるけど少し黙れよ。周りに迷惑だぞ」
涙を流し、恐怖しながらもさやかはゾンビを撃っていく。巧はなんとか冷静を保ちつつ進んでいく。

～～～～～

『Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！　Ｙｏｕ'ｓ　Ｐｅｒｆｅｃｔ！』

「よし、やったぜ！」
「はぁ……はぁ……、二重の意味で死ぬかと思ったぁ……」
どうにかゲームをクリアした巧とさやか。さやかは涙を流しっぱなしであった。
「夜絶対泣くよこれ……」
「よし、今度はあそこだ」
巧が指差したのは、バッティングセンターゾーンであった。

「なるほど、ここのは速度をランダムにできるのか、ちょうどいい」
「……今度はなに？」
「反射神経とか、反応系の能力を鍛える。これから速度ランダムで球が飛んでくるから、それをちゃんと狙って打て」
そう言って、巧はマシンを稼動させる。ちなみに、速度は８０～１８０ｋｍまで出るらしい。そして、一球目が飛んでくる。

「ふん！」
さやかは渾身の力でバットを振るが、空振りに終わる。
「どうした！　目をつぶってたら当たんねぇぞ！」
「わ……わかってるって！」
さやかは眉間にしわをよせ、次こそはと力む。巧を腕を組み壁によしかかりながらそれを見ていた。巧はふと、ある事を思い出す。さやかの行動を思い出そうとしたときによみがえった、ほむらのあの言葉を。

『乾巧、ちゃんと巴マミの戦いを見ることね。おそらくあなたは幾たびの戦いに勝ち抜いてきた、だからわかるはずよ。巴マミが有害な存在である決定的な証拠が』

巧は思い出してみる。マミの戦いぶりを。初めて会った時、圧倒的な力を見せ付けて使い魔を一掃した。薔薇園の魔女との戦い、ピンチにはなったものの、『ティロ・フィナーレ』で撃退した。アントオルフェノク……は流すとして鎖の魔女の成長途中の使い魔……必殺技だそうとしたらマミに顔面を蹴られたときのことを思いだす。それからは魔女退治をするものの出てくるのは使い魔のみであった。それでも、マミは全力で戦っているが。

「おーい巧！　球でなくなった！」
「あ、ああ」
巧は新たに金を入れ、マシンを再び稼動させる。
（まぁ……違和感が無いわけじゃない。マミの戦い方は確かに少し妙だ。戦闘が終わればどこからか出した紅茶をすすったり、使い魔を大技で倒したり……）
その時、巧の脳裏にあることが思い浮かぶ。考えたくも無いことが。
（まさか……な）

「おっしゃあ！　だいぶ当たるようになってきたぞぉぉぉ！！」
さやかの大声が聞こえ、我に帰る巧。さやかはバットを構え、飛んでくる球を正確に打っていく。タイミングのつかみや反射神経がよくなってきたのだろう。

「うりゃああ！」
その日の魔女退治、さやかは果敢に立ち向かっていた。使い魔をバットで打ち返し、その使い魔でさらに使い魔を倒したり。さやかは確実に強くなっていた。
「まさか本当に強くなるなんてな……」
「あれ嘘だったの！？」
巧……ファイズの言葉におもわず突っ込むさやか。しかし仮に嘘だったとしても「嘘から出たまこと」、さやかが強くなったことに変わりはない。ファイズは、仮面の下で笑っていた。
「決めるわよ！　ティロ・フィナーレ！」

≪Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ≫

「やあああああ！！」
『ティロ・フィナーレ』、『クリムゾンスマッシュ』が炸裂、使い魔は全滅し結界が消える。今回は使い魔のみだったようだ。

「いよっしゃあ！　今日は助け無しでまどかを守りきったぞー！」
さやかは両腕を上げ喜ぶ。
「やったねさやかちゃん！」
「すばらしいわ美樹さん、これも乾さんのおかげですね」
まどかとマミもさやかを見て笑みを浮かべていた。
「これも巧のおかげだわ、バリサンキュー！」

「なんだそれ。でもまぁ……」
変身を解いた巧はあきれて突っ込む。そして……

「がんばったな、さやか」
「……ッ！？」
巧はさやかの頭をなでた。巧もまた笑みを浮かべながら。ぽかんとしていたさやかだったが、少しして顔を真っ赤にして巧の手を払った。
「ちょ……止めろって！　……あーもう！　巧相手に……あたし不覚ッ！」
「それはどういうことだ」
さやかは真っ赤になった耳を手で隠しながら巧に背を向ける。巧は眉毛をぴくりと動かし、怒りをあらわにする。

それを見て、まどかとマミは微笑んでいた。
「……和みますねぇ……」
「ええ、青春ね」
そう言って、二人は歩きだす。
「おい、ちょっと待てって！　行くぞさやか！」
遠ざかる二人に気づき、巧もかけていく。
「……『がんばったな』……か」
さやかは頭を掻き、先ほどのことを思い出した。
「……へへっ」
（舞い上がっちゃってますね、あたし……）
にやけるさやかだったが、まどか達が遠くに言っていることに気がつき、あわてて駆け寄っていくのだった。

To Be Continued.

Next Part B.

外伝【第１３．５話　ＰａｒｔＡ】（後書き）

元々は小さい話をまとめる予定だったのに、ここに来てさやか熱爆発ですよｗ
というわけでさやかちょっと強くなっちゃいました。しかし今回のたっくんなんかキャラおかしいぞ；　何気にＰＳ２ネタもあったり。
というわけで外伝続きます。
ちなみに作中出てきたシューティングゲームは架空のゲームです。
仮に同名のゲームがあってもフィクションなんで一切関係ありません。
しかし、作中のゲームセンター設備いいなｗｗｗ　もちろんファイマギオリジナルですけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3532v/

仮面ライダー×魔法少女　５５５☆MAGIKA　～THE LAST K/NIGHT MISSION

2011年10月8日03時22分発行